

Nord-Est

日本フランス語フランス文学会東北支部会報 第15号

目次

【シンポジウム報告】

ボードレールの《世界性》

—— 西洋と東洋の境界を超えて ——

p.1

岩津 航, 海老根 剛, 寒河江 光徳, 小川 利康
坂巻 康司 (コーディネート)

【論文】

19世紀フランスにおけるロラン夫人像

ラマルティーヌ、ミシュレ、サント＝ブーヴ

p.21

中里 まき子

世紀末小雑誌からみる前衛の制度化の試み

—— 『ブリューム』の「タベ」と若手グループの誕生 ——

p.35

合田 陽祐

編集後記 p.51

投稿規定 p.52

日本フランス語フランス文学会 東北支部

2022

ボードレールの《世界性》

— 西洋と東洋の境界を超えて —

坂巻 康司

「いま、ボードレールは栄光の絶頂にある」。ヴァレリーがこのように宣言したのは、いまから百年ほど前の 1924 年であった。その約十年後、「ボードレールの文学においては、何一つ古びていない」とベンヤミンは語っている。これらの言葉は、シャルル・ボードレール **Charles Baudelaire (1821-1867)** が誕生してから二百年を迎える現在、いまだに効力を失っていない。

今日、ボードレールがフランス文学に与えた影響が計り知れぬほどのものだった、ということを否定する者は恐らく誰もいないのではないか。20 世紀を代表する詩人の一人、イヴ・ボヌフォワ **Yves Bonnefoy (1923-2016)** が、その生涯を通して繰り返しボードレールについて語った、ということ。2021 年春までコレージュ・ド・フランスの教授を務め、2022 年にアカデミー・フランセーズの会員に選出されたプルースト研究者、アントワヌ・コンパニョン **Antoine Compagnon (1950-)** が、ボードレールを主題とする書物を何冊も刊行している、ということ。また、亡くなる間際まで詩と思想の分野を牽引し続けたミシェル・ドゥギー **Michel Deguy (1930-2022)** までもが晩年にボードレール論を刊行した、ということ。これらの点に、現代フランスにおいても到底失われることがないボードレールの“途方もない魅力と影響力”が表れている。

しかし、ボードレールが諸外国の文学に与えたインパクトもまた、尋常でないほど巨大なものだったということも、当然ながら忘れてはならない。本シンポジウムでは生誕 200 周年というこの機会に、フランス文学以外の専門家をお招きし、《各国において、ボードレールの作品はいかなる形で受容されて行ったのか》という問題を考えることを試みた。もちろん、こうした試みがこれまで全くなかった訳ではない。実際、ボードレールの日本への受容という問題は、永井荷風、谷崎潤一郎、福永武彦のような小説家への影響、あるいは大手拓次や萩原朔太郎のような詩人への影響を論じる領域で、これまでも比較的頻繁に取り上げられて来たテーマである。そこで今回は、日本を除くアジア、そしてヨーロッパ、ロシアにおける「受容」の実態に焦点を絞り、ボードレールの《世界性》について考察した。

この二百年の間に、ボードレールは果たして《世界的》な詩人となったのか。もしもそうだとしたら、その理由は何だったのか。果たして、ボードレールは他の国に簡単に受け入れられるような詩人なのか。そして、ボードレールが受け入れられるとしたら、その国のどのような要素が、どのような土壌が、それを可能にするのか。また、ボードレールの詩のいかなる性格がそれを可能にするのか。逆にももしもボードレールを拒絶する国があるとしたら、それはどのような国なのか。——私たちがボードレールの《世界性》を考えると、このような様々な問いが浮かんでくるはずである。

他方でまた、ボードレールは「この世界の果てならばどこへでも」と歌い、「世界の終わり」について語った詩人でもあった。ボードレールが逃れたいと思い、その死を宣告した《世界》とは何であり、何でなかったのか。また、ボードレールは「旅すること」の魅力を煽り、「旅」に出ることを誘い続けた詩人であった。ここではない「どこか」を思い、夢見るボードレールにとって、外国とは、外の世界とは何なのか。そのような問いも浮かんで来る。このシンポジウムの背後には、そうした幾つかの問いが折り重なっている。

こうした問題を考えるため、今回のシンポジウムには、他地域、他学会の研究者にご参加いただいた。以下、簡単にパネリストを紹介しておく。

ルーマニア生まれの詩人バンジャマン・フォンダーヌについて語っていただいた岩津航先生（金沢大学）は、フランス文学（プルースト）、比較文学（福永武彦、加藤周一）両分野の研究者として数多くの業績を発表されている。

ヴァルター・ベンヤミンにおけるボードレール受容について語っていただいた二人目の発表者、海老根剛先生（大阪公立大学）は、ドイツ文学をご専門とされ、現在は 19 世紀末から 20 世紀初頭の「群衆」の問題について多角的な視野で論考を発表されている。

コンスタンチン・バリモントそしてウラジミール・ナボコフにおけるボードレールの受容について語っていただいた三人目の発表者、寒河江光徳先生（創価大学）は、ロシア文学研究の領域で精力的にご論考を発表されている。

そして最後に鲁迅、周作人の兄弟がボードレールをいかに受容したのかについて語っていただいた小川利康先生（早稲田大学）は、中国文学をご専門とされ、近年、周作人を集中的に論じた研究書を刊行されている。

以上、四つの視点から照射されるボードレールの姿を見つめることが、今回のシンポジウムの眼目となる。

（東北大学）

フォンダーヌとボードレール

岩津 航

1. はじめに

ボードレールは世界中で読まれた。それはボードレールが提出した詩のあり方が、都市に人口が集中する近代社会にとって、極めて適切で、重要な意義をもっていたからにほかならない。近代パリにおいてボードレールは、第一に、置き換え不可能な個人としての存在を捉えた。誰もがそれぞれ交換できない生を生きている。そこから、第二に、本来は広く慣習的な記号であったはずの「象徴」を、個人の感覚において作り変える必要性を感じた。かくしてボードレールは、実存という主題と、象徴という手法を詩に導入し、世界中の詩のあり方を変えた。ここでは、ルーマニア出身の詩人バンジャマン・フォンダーヌ（Benjamin Fondane, 1898-1944）におけるボードレール受容を検証する。

2. ルーマニアにおけるボードレール受容

フォンダーヌは本名をベンジャミン・ヴェクスラー（Benjamin Weckslar）といい、ユダヤ人の多い都市ヤシに生まれた。ドイツ語でハイネを読み、フランス文学に原文で熱中した早熟なフォンダーヌは、16歳にしてベンジャミン・フンドヤヌ（Benjamin Fundoianu）という筆名で、ボードレールの「地獄に堕ちたドン・ジュアン」のルーマニア語訳をヤシの雑誌に発表している。

ルーマニアでのボードレール受容は、1890年から1920年の象徴主義時代に盛んになった。19世紀後半のルーマニアの知識人は、国民文化の形成においてラテン性を称揚し（1860年にキリル文字は全廃）、その流れでフランス語を重視した¹。また、もともとフランス語に習熟していて、原文で読む詩人も多く、翻訳史を追うことが必ずしも詩人たちの読者としての受容史と一致するわけではない。むしろルーマニア語への翻訳は、詩人たちがルーマニア語で創作するために必要な作業であり、ボードレールの訳詩のほとんどが韻文訳だった。もちろん、その結果として、より若い世代がルーマニア語訳を通じてボードレールにアクセスしやすくなったということはある²。

¹ Antonesei, Ana-Maria, « Le phénomène Baudelaire dans la traduction », *Al-Kīmiyā*, vol. 20, Université Saint-Joseph de Beyrouth, 2021, p. 29-31.

² Ioan Pop-Curseu, « Les poètes roumains lecteurs de Baudelaire », *L'Année Baudelaire*,

3. フンドヤヌにおけるボードレールの影響

ルーマニアの詩人たちにとって、ボードレールの詩学は *spleen* と *correspondances* に要約される。*Spleen* という題名の詩を、彼らはこぞって書き、秋の憂鬱や追憶を韻文に綴った。フンドヤヌもその一人である。1923年までのルーマニア語詩を集めた『風景』(1930)の冒頭を飾る「パレード」は、「蜘蛛のように、スプリーンは自らかけた網から這い逃げようとする³」という一行から始まる。「秋が欲しい」と始まる無題の詩は、秋、釘、血、ワインといった語彙が、ボードレールの「秋の歌」を想起させずにはいられない。

秋が欲しい、たわわに実った葡萄畑、陽気さとヴァイオリン弾き
ごろごろ鳴る大樽と樽職人たち
蛇口と釘でしっかり閉じ込めて——
そこにワインを注ぐために、殉教者の血のように赤いワインを⁴。

また、ここに、20世紀初頭のルーマニア文学で田園を理想化した「種蒔く人 (*Sămănătorismul*)」の残響を見出すことも可能である。

いずれにせよ、1910年代のフンドヤヌには、まだ伝えるべき強いメッセージはなく、多くのルーマニアやフランスの詩人を模倣しながら、詩人としての技術を磨いていたのである⁵。

4. フンドヤヌのボードレール論

1919年にブカレストに移ったフンドヤヌは、アヴァンギャルド運動を牽引する存在となる。「芸術のための芸術」の信奉者を宣言⁶し、1921年に刊行した評論集『フランスのイメージと書物』では、アンリ・バタイユのボードレール論を批判し、詩人自身の苦しみが人を慰める力となるのではなく、詩の芸術としての完成度こそが苦しんでいる人を慰めるのだ、と論じた。「我々もボードレールに慰められる、だが、我々を慰めるのは彼の芸術であって、彼の苦しみでもなければ、我々の不満——どのみち生まれるだろうところの——のはけ口になるよう

vol. 21, 2017, p. 73-88.

³ Benjamin Fondane, « Parade », *Paysages*, traduit du romain par Marina Vancî-Perahim et Odile Serre, suivis de *Le mal des fantômes*, Paris-Méditerranée, 1999, p. 25.

⁴ Benjamin Fondane, « Je veux l'automne, la vigne... », *Paysages, op. cit.*, p. 66.

⁵ Mircea Martin, « Fondane et les poètes roumains », *Cahiers Benjamin Fondane*, vol. 12, 2009, p. 122-132.

⁶ Benjamin Fondane, « Le Reniement de Pierre », *Poèmes d'autrefois*, suivi de *Le Reniement de Pierre*, traduit par Odile Serre, Le Temps qu'il fait, 2010, p. 93.

な状況の一致でもない。芸術の形而上的慰撫であって、感情的慰撫ではない⁷。」典型的な象徴主義者の立場である。

しかし、1923 年、パリに移住した彼は、フンドヤヌをフランス風にフォンダーヌと改め、フランス語詩人・批評家として再出発した。1926 年、シェストフと出会う。シェストフは、キェルケゴールやドストエフスキーの読解を通じて、理性や合理性の「独裁」を批判し、不条理を受け止めることの重要性を説いた。言語は、現実に見せかけの秩序を与えるだけで、現実を変えることはできない。逆の言い方をすれば、言語の秩序をすり抜け、秩序に抵抗する出来事のみを「現実」と呼ぶ、ということでもある。フォンダーヌにとって、詩は、散文的言語によって秩序づけられた現実に対して、言語で抵抗するための手段となる。

5. フォンダーヌにおけるボードレールの影響——「旅」と「ユリウス」

1928 年のブエノスアイレスへの船旅をきっかけに長篇詩『ユリウス』(1933)が書かれる。オデュッセウスの神話を踏まえているという点で、この詩はボードレールの『悪の華』第二版の最後に収められた「旅」と共通している。

「世界は開く、海と船を眺めていると」という『ユリウス』第一章の冒頭部は、「ある朝、僕たちは旅立つ、脳髄に炎を燃やして」という「旅」の第一章第二連を思わせるような港の風景から始まる。ボードレールは意気揚々と旅立つが、やがて「旅から引き出されるのは、なんと苦い知識だ」と言い、世界の限界を知って落胆する。旅の苦さはフォンダーヌにとっても同じだった。「なんと苦いことか、私たちの運命の味は！／——すすり泣きや不満が何の役に立つのか⁸？」ただし、旅が映し出す「私たちのイメージ」が、20 世紀の東欧ユダヤ人であるフォンダーヌにとっては、船旅で出会った移民の姿だった、という違いがある。「生まれつきのユダヤ人、しかしオデュッセウス」であるフォンダーヌは、『ユリウス』の最後で、セイレーンの歌を聴くために帆柱に縛りつけられたオデュッセウスの故事を踏まえて、「自分自身に縛られているなんて、あんまりだ」と叫ぶ。それは「旅」の最後でボードレールが叫んだ「深淵の底に飛び込みたいと思う、地獄か天国か、それがどうした？／未知の奥底に新しいものを見出すために！」を反復するものだった。理性が人間の条件にたやすく限界を作り出し、安定した秩序を志向しようとするのに対して、「移民」は自分だけの言語を求め、それによって初めて「人間」になろうとする。

この「人間」という言葉は、「十全な人」を意味するイディッシュ語の Mensch を踏まえていると考えられる。自らの実存を引き受け、それを乗り越えようとす

⁷ Benjamin Fondane, « Baudelaire », *Images et Livres de France*, traduit du roumain par Odile Serre, Paris-Méditerranée, 2001, p. 157.

⁸ Benjamin Fondane, *Ulysse* (première version), Non Lieu, 2018, p. 37.

る者が、ユダヤ的文脈で捉え直されている。フォンダーヌは『ユリウス』刊行後も加筆訂正を続けたが、1944年の最終稿では「そしてイェルサレムは、我々が探し求めても見つかることのない、／休息の港の象徴と神話にすぎなかったのか⁹」という一節がある。ここでのイェルサレムとは、決して将来イスラエルという国の首都となるべき都市ではなく、帰り着くことのない、おそらく「この世の外のどこか anywhere out of the world」にあるイタカの別名だ。旅は終わるべきではない、という感覚は二人の詩人に共通していた。二人がオデュッセウス神話を取り上げたのは、偶然ではない。フォンダーヌは帰還の先延ばしこそが「オデュッセウスの美学¹⁰」だと定義した。

反ユダヤ主義が跋扈するルーマニアに帰ることはできなかった（出生地ヤシは1941年6月29日に死者11000人を出したルーマニア最大のポグロムの舞台となった¹¹）。むしろアルゼンチンへの亡命を画策し、ひょっとしたらスペイン語作家への転身を考えていたかもしれない¹²が、運命はそれを許さなかった。1938年にフランス国籍を取得したものの、ゲシュタポに逮捕され、ドランシー収容所からアウシュヴィッツへと移送されたフォンダーヌは、1944年10月、ガス室で殺された。

6. 遺著『ボードレールと深淵の経験』について

フォンダーヌが1940年頃から死の直前まで書き続けた『ボードレールと深淵の経験』は、ボードレール研究の古典としてプレイヤー版の書誌にも挙げられる名著である。題名通り、『悪の華』に頻出する「深淵 (gouffre)」をキーワードに、ボードレールを実存主義的に論じた本である。

フォンダーヌは「深淵とは、我々が信じている最も確かで安心できるものにじつは根拠がないことを知り、どんなに無理だろうともその根拠をあきらめなければならず、我々にかけていたある種の魔法なしには、世界は説明できないのだ、というヴィジョンを突如として抱くことである¹³」と定義する。ボードレールの深淵とは、存在の根拠を信じられなくなる虚無の瞬間だということである。

このようなボードレール理解は、ツェランやボヌフォワにまで受け継がれて

⁹ Benjamin Fondane, *Le mal des fantômes*, Verdier, 2006, p. 33.

¹⁰ Benjamin Fondane, *Baudelaire et l'expérience du gouffre*, La Fabrique, 2021, p. 335.

¹¹ Jil Silberstein, *Les Voix de Iasi*, Noir sur Blanc, 2014, p. 481 et seq.

¹² Ko Iwatsu, « Benjamin Fondane en quatre langues », *La Revue des lettres modernes : Les Conrad français. Écrivains, étrangers, français (1918-1947)*, coll. « Minors XIX-XX », vol. 3, Classiques Garnier, 2021, p. 78-79.

¹³ *Baudelaire et l'expérience du gouffre*, op. cit., p. 219.

いる、とジゼル・ヴァネーズは指摘している¹⁴。ボヌフォワもまた、ボードレールの深淵を詩的経験の根幹に置いて考えていた。言葉の外にある事物の世界は、死すべき身体が存在する現実である。死を呼び込むことで、ボードレールはもはやそうした外部の現実を描く必要がなくなった。ボヌフォワは「ボードレールが言葉に対していつも同じ怒りと性急さをもって身を捧げるのは、言葉が私たちが魔法をかけながら私たちを奪うということ、言葉は真の救いではないということをもはや忘れていないからである¹⁵」と指摘した。ボヌフォワが言う「言葉の魔法 *enchantement*」は、フォンダーヌの「理性の魔法 *envoûtement*」とほぼ同じである。言葉によって世界の直接性が覆い隠されるとき、詩は言葉によって言葉の秩序を越えるという矛盾した使命を帯びる。秩序だった言葉の「魔法」を解き、死を直視することが、言葉が生身の人間へと回復するためには必要なのだ。

かくして、フォンダーヌのボードレール受容は、ルーマニア文学の近代化の文脈から始まり、やがてシェストフ哲学を経て、理性を越えた生身の実存へと開かれるものとして、後続のフランス文学へと組み込まれていったのである。

(金沢大学)

¹⁴ Gisèle Vanhese, *Benjamin Fondane. Dialogues au bord du gouffre*, Rubettino, 2018, p. 83.

¹⁵ Yves Bonnefoy, « L'acte et le lieu de la poésie », dans *Improbable et autres essais*, suivi d'*Un rêve fait à Mantoue*, Gallimard, coll. « Folio », 1992, p. 116.

ボードレールを読むベンヤミン

『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』の詩篇の読解をめぐって

海老根 剛

本発表の主題は、1938年に執筆された「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」においてヴァルター・ベンヤミンが提示したボードレールのいくつかの詩篇の解釈を検討し、ベンヤミンがボードレールの詩をどのように読んだのかを明らかにすることである。ベンヤミンによる詩篇の解釈を検討すると、その読解がかなり特殊なものであることが明らかになる。今回の発表では、そうした特殊さが二つの読みのストラテジーと結びついていることを確認したうえで、そのようなベンヤミンの読解を私たちはどのように評価すべきかを考察する。

本発表では特に二つの詩の読解に注目する。ひとつは『悪の華』に収録された韻文詩「屑屋たちの葡萄酒」であり、もうひとつは『パリの憂愁』に収録された散文詩「群衆」である。この二篇の詩の読解には、ベンヤミンが「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」で実践している二つの読みのストラテジーが典型的な仕方で表れている。

「屑屋たちの葡萄酒」は、ベンヤミンが「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」で最初に引用して解釈する詩篇である。まずベンヤミンが引用しているボードレールの詩の一節と、それに対してベンヤミンが提示している解釈を較べてみる。

見られる姿は、詩人のように、首を振ったり、つまずいたり、
壁にぶつかったりしながら、やって来る、一人の屑屋、
密偵（いぬ）どもなどは、家来と思つて、気にすることもなく、
心の底までぶちまけて、光輝ある計画を述べ立てる。

おごそかに宣誓したり、崇高な法律を發布したり、
悪者どもを打ち倒したり、犠牲者たちを助け起こしたり、
頭上に懸る大空を、玉座の上の天蓋とも思いながら、
われとわが身の美德の、輝かしさに酔う。

（『ボードレール全集1』，阿部良雄訳，筑摩書房，p.206-207）

この一節にベンヤミンは次のようにコメントしている。

屑屋はもちろんボエームに含めることはできない。だが、文士から職業陰謀家に至るまで、ボエームに属する誰もが、屑屋のうちに自分自身の一片を見出すことができた。誰もが、社会に対する多少とも漠とした反抗心をもって、多少とも困難な朝をまえにしていた。誰もがそれぞれの時に、この社会の基盤を揺るがす者たちへの共感をもつことができた。屑屋はその夢において孤立してはいない。戦友たちがつき従っていて、彼らのまわりにも酒樽の香があり、彼らの髪も戦いのなかで白くなった。屑屋の口ひげは古ぼけた軍旗のように垂れ下がっている。巡回の途上で、密偵（いぬ）どもに出会うが、屑屋の夢は彼に、密偵どもにたいする支配権を与える。

(Gesammelte Schrifete 1-2, Frankfurt am Main, S.522)

注目すべき第一の点は、ベンヤミンの注釈において、屑屋のイメージが文士や職業的陰謀家のようなボエームと関係づけられ、厳密に言うならば、ボードレールの詩のテキストにはない意味連関が作り出されていることである。さらに「戦友たちが付き従っていて」以下の部分では、ボードレールの詩の一節がかなり忠実に引用されていることにも気づく。

第一の点について言うと、ここでベンヤミンが文士や職業陰謀家といったボエームを持ち出すのは、上記の引用に先行する箇所、マルクスが「新ライン新聞」に発表した書評の一節を引用し、下っ端の陰謀家たちが安い居酒屋にたむろする光景を喚起していたからである。そのさいベンヤミンは「そこに淀んでいたむっとした空気はボードレールにも馴染みのものだった」と指摘し、「この空気のなかで、「屑屋たちの葡萄酒」という偉大な詩は生まれ育った」と述べている (S. 519) 。

さらに屑屋のイメージについても、ベンヤミンはボードレールの詩を引用する直前の箇所で、もうひとつ別のイメージを召喚している。それは、当時の警察局長の発言を引用することによって喚起されるイメージであるが、そこでは葡萄酒税を逃れるために市門の外の居酒屋に行き市内に帰ってくる、酔った下層労働者たちの姿が浮かびあがる。彼らは治安当局の視線に対して、反抗的にみずからの陶醉を誇示して見るのである。

すなわち、ベンヤミンが「屑屋たちの葡萄酒」を引用するとき、彼は居酒屋にたむろして秩序転覆を夢想する陰謀家たちのイメージと、安い葡萄酒を飲んで酔っ払って市内に戻ってくる下層労働者のイメージを、ボードレールの詩句が喚起する屑屋のイメージに重ね合わせている。それによって、もうひとつの注目

すべき点として挙げた、ベンヤミンの注釈のなかでなされるボードレールの詩句の間接引用は、元の詩句にはない意味を帯びることになる。ボードレールの詩句においては、「戦友たち」と呼ばれているのは他の屑屋仲間だったのに対して、ベンヤミンの引用においては、都市下層民としての屑屋の隣に、屑屋の夢を共有する「戦友」として、職業的陰謀家や詩人そして下層労働者が立ち並ぶことになる。

ここにはベンヤミンがこのテキストで実践している引用の技法を見ることができる。複数のイメージを重ね合わせ、オーバーラップさせるモンタージュとしての引用である。このようなベンヤミンのモンタージュとしての引用において目指されているのは、元のテキスト、つまりボードレールの詩句に含まれていた意味を取り出すことではなく、複数の出自の異なるイメージを重ね合わせることで、明示的にはその詩句に含まれていなかった意味を創出することである。ベンヤミンが試みているのは、ボードレールの詩句の「本当の意味」を解明することではなく、19世紀中頃のパリに関わる「歴史のイメージ」を構築することなのである。それは解釈学的な読解と鋭く対立する。

次にベンヤミンによる散文詩「群衆」の読解を検討する。ここでもまずベンヤミンによる詩句の引用とそれに対する注釈を並べてみる。

詩人は、思いのままに自分自身でもあり他者でもあることができるという、この比類のない特権を享けている。一個の身体を求めてさまようあれらの靈魂たちと同じように、詩人は、欲する時に、どんな人物の中へでも入ってゆく。彼にとってだけは、すべてが空席なのだ。そして、ある種の場所が彼に閉ざされているように見えるとすれば、とりもなおさず、彼の目から見て訪れるに値しないものであるからだ。

(『ボードレール全集4』, 阿部良雄訳, 筑摩書房, p.26-27)

この引用に続けてベンヤミンは次のように書く。

ここで語っているのは、商品自身である。最後のほうの言葉はまさに、美しく高価な品々の並べられた陳列窓のそばを通りすぎる哀れな貧乏人に商品がどんなことをつぶやきかけるかを、かなり正確に理解させてくれる。美しく高価な品々は貧乏人のことなど何も知りたいとは思わない。そうした品々は貧乏人には感情移入しないのだ。(S.558)

これは驚くべき解釈である。ボードレールの散文詩に、この読解を正当化するような表現を見いだすことは難しい。

ここでベンヤミンは、本来はアレゴリーとして書かれていないイメージをアレゴリーとして読んでいる。すなわち、散文詩に登場する「詩人」を「商品」という抽象概念を擬人化したアレゴリー表現として扱っているのである。

佐々木健一監修の『レトリック事典』（大修館書店）は、アレゴリーを「独立した表現システムがあり、それが全体として別の事柄を指し示し、語る、という技法」と定義したうえで、アレゴリーにおいては「表現の位相と、理解された位相とが融合せずに独立していて、照応関係を認めることによって、表現されている意味から別の意味の理解へと導かれる」点に特徴があると説明している（p.484）。独立照応のシステムとしてのアレゴリーでは、象徴とは異なり、イメージのうちに意味が内在していない。抽象概念の擬人化の場合、人物像と概念との関係は外在的なものとどまっており、両者の照応関係はなんらかの仕方ですのつど新たに確立されねばならない。それゆえ、ポール・ド・マンが指摘したように、アレゴリー記号はつねに先行するアレゴリー記号を反復することによってしか機能しえない。まったく新しいアレゴリー表現の場合には、その基礎にある照応関係を明示的に説明する言葉が必要になる。これこそベンヤミンが散文詩「群衆」の分析でしていることである。「マルクスがときおり、冗談で語っているあの商品の魂というものがほんとうにあるとすれば、それは魂の国にかつて現れたうちで、最も感情移入の能力に富んだ魂であろう。（中略）しかしながら、感情移入は、遊歩者が群衆のなかで身をゆだねる陶酔の本性である」とベンヤミンは書くのである。

こうしたアレゴリー化する読解は、テキストのうちに、それが明示的に意味しているようにみえる事柄とは異なる「別の意味」を読み取ることを目指している。ベンヤミンが散文詩「群衆」に読み取る「別の意味」とは、遊歩者として群衆に身をゆだねる詩人はすでに文学市場における商品であるにもかかわらず、そのことにまだ気づいていないという歴史的現実への洞察である。ここでもベンヤミンのボードレール読解は、解釈学的読解の対極に位置している。

ここで考察した二つの「読むこと」のストラテジーは密接な関係にある。ベンヤミンにとって、イメージのオーバーラップはアレゴリーの形式である。したがって、モンタージュとしての引用はアレゴリー化する読解の構成要素なのである。ベンヤミンはボードレールの詩に登場するアレゴリーに注目しただけなく、すべての詩篇をアレゴリカルに読んでいた。アレゴリー化する読解は、完結した秩序としての作品を砕き、外へと開き、別の意味を産出するように強いる。ベンヤミンのボードレール読解に固有の可能性とリスクはこの点に存していると言えるだろう。

（大阪公立大学）

ロシア文学におけるボードレール受容について

——バリモントとナボコフを例に——

寒河江 光徳

1. ナボコフ作品におけるバリモントへの言及と共感覚

ナボコフのロシア語最高傑作とされる『賜物』においては、ロシア象徴派を代表とする B の頭文字ではじまる 5 人の詩人について言及がなされている（そのうちコンスタンチン・バリモント、ヴァレリー・ブリュソフ、アレクサンドル・ブロック、アンドレイ・ベールィについては論ずるまでもない。あと 1 人については確定はなされていないが、イヴァン・ブーニンという説がある。）

「それとも、反対側から照らしてみれば、『未曾有の悦楽の雲』というのもある。いや、ここでうるさく選り好みするのは罪ですよ。当時のぼくの意識は、有頂天になって、感謝しながら、ごちゃごちゃ批判しようなどとは考えずに、苗字が B で始まる 5 人の詩人のすべてを、新しいロシア詩のすべてを、新しいロシア詩の五感としてそっくりそのまま受け入れていたんです」¹

主人公フォードルは、B では始まる 5 人の詩人が書いた作品を五感としてそのまま受け入れるようとする。ここでは、五感を水平にクロスさせる共感覚が息づいている。つづいて『賜物』においては、次のような一節がある。

熟練の目で彼は、毎日心の五感に引っかかるもの、日々苦痛をもたらすようなものを通りに探したが、そのようなものはどこにも見受けられなかった、その代わり春の薄墨色をした昼の散乱光は、そんなやましさのかけらもないどころか、快晴の日であるならば、必ず顔を出すに違いない別の瑣末なことも和らげてしまうことを約束していたかのようだ。たとえば、口に含むとすぐさま感じる不快なオートミールか、ハルヴァの味をした建物の外壁色、あけっぴろげ

¹ B.Набоков. *Собрание сочинений* русского периода в пяти томах М. 2000.V.ナボコフ、『賜物』，沼野充義訳，河出書房，2010，P.117 を参照。

に目に飛び込んでくる建築物のディテール、むかつくほどの紛い物のカリアティッド（女人像柱）は、支えとなるどころか漆喰の塵と化してしまう。²

薄墨色の錯乱光（視覚）は、不快なオートミールかハルヴァの味（味覚）に置き換えられ、それが建物の外壁の色にまたもや移し替えられる。同じくナボコフによる短編小説の傑作とされる「フィアルタの春」では次のような箇所も見受けられる。

ぼくはこの小さな町が好きだ。それは、この名前の響きのくぼ地に、あらゆる花のうちでも一番ひどく踏みしだかれてきた小さく暗い花の砂糖のように甘く湿った匂いが感じられるからだろうか。それともヤルタという響きが調子っぱずれに、しかしはっきり聞こえるからだろうか。あるいはこの町の眠たげな春がとりわけ魂に香油を塗りこむような作用を及ぼすからなのか。わからない。いずれにせよぼくはこの町で目覚めてとても嬉しかった。そしてシャツの上に直にレインコートをはおり、帽子もかぶらず、頭を濡らし、小川の流れと逆向きに、べたべた足音を立てながら坂を登っていくのもまた嬉しかった。³

フィアルタは架空の街であり、フィアルカ（すみれ）とヤルタが掛け合わされている。ナボコフの作品において随所に見受けられる共感覚の要素は、紛れもなくバリモントをはじめとするロシア象徴派詩人から受け継いだ文化的遺産と言える。バリモントは、ボードレールの詩を翻訳し積極的にその詩学を取り入れたことで知られている。例えば、こんな詩もある。「太陽は草の匂いが、 / 瑞々しい睡蓮の匂いが、 / 春に目覚めた故に、 / 松脂くさい匂いがする。 / 柔らかく透き通った織物のような / 酔う鈴蘭の匂いがする、 / それは誇らかに開花した、 / つんとくる土の匂いに囲まれて。」（視覚から嗅覚への移行）。一方、ナボコフの小説の主人公は、バリモントへのアンビヴァレントな感情を次のように吐露している。

「おそらく、ぼくの若い頃の抒情詩ローラーの動力が弱かったせいだろうか、動詞やその他の品詞に僕はそれほど興味を持たなかった。韻律やリズムの問題はまた別だ。生まれつきヤンプに傾きがちな性格と戦いながら、僕は三音節脚の韻律を追いまわした。その後、韻律から逸脱することに夢中になった。ちょ

² 同書の沼野訳を参照。

³ V.ナボコフ、『ナボコフ全短編』，沼野充義訳，作品社，2011，P.553.

うど、「おれは大胆不敵になりたい」の著者が例の人工的な韻律を使い始めた頃だった。それは行の真ん中に余計な音節を一つ、こぶのようにつけた四脚ヤンプ（あるいは、別の言い方をすれば、四行目と最後の行以外は女性韻で終わる、二脚八行の詩なのに、四行詩の形で提示されたもの）で、このような韻律によってかつて一つとして本当に詩的な意味のある詩が書かれたことはなかったのではないだろう。ぼくはこの踊るせむしに夕焼けと小舟をもたせてみたが、驚いたことに夕焼けは消え、小舟沈んでしまった。」⁴

プーシキンをはじめとするロシア詩の伝統的な形は四脚ヤンプ（つまり、弱強格）であるが、バリモントは四脚のうち二脚と二脚の間に休止符（цезура）を挟むユニークな詩形をつくりあげることに成功している。あるいは四脚と数えずに一詩行を二脚で終わるとする女性韻（つまり、アクセントがないところで終わらせるために一音節を余分に加えたもの）と解釈することもできる。『賜物』の主人公フォードルはこのような形で詩を書くことを夢見つつ、バリモントにも果たしえなかった真正な価値を持つ詩を世に残そうと決意するのである。

2. バリモントの作品におけるボードレー性について

ところで、バリモントが生きたロシア象徴派が栄えた時代は、ロシア文学においてニーチェ主義と言われる世紀末的なムードが漂う雰囲気を含んだ時代とも重なる。バリモントの作品における美学は、既成の価値観の否定という点で、ニーチェとフランス象徴派の産物であるという指摘がなされている。「コンスタンチン・バリモントの美学とは、その極めて独創的な方法で印象を知覚していく個性の能力の自覚という点で、ニーチェの力と創造性に基づく新しい価値の呼びかけのことであり、それはフランス象徴主義の産物でもある。⁵」初期においては主にフランス象徴主義の影響が濃厚なものであり、彼の最も評価された作品（『太陽のようになろう』"Будем как Солнце"）においてニーチェの影響が優勢を占めてくる。例えば、「共鳴」（Аккорды⁶）と題された詩には、ボードレーの“Les Phares”へのオマージュの香りが漂う。

私の夢に出たのは悩ましきゴヤ、怪物の夢を描いた画家、

⁴ 『賜物』, P.238-239.

⁵ A.Lane. "Bal'mont and Skriabin: The Artist as Superman." Nietzsche in Russia. Pp.195-218, Princeton, Princeton University Press. 1986.

⁶ К.Бальмонт. Избранные стихотворения и поэмы. Берлин. 1975.

悩ましく人生をあざけては、死後の世界を疑う。

私の夢に出たのは不滅のヴェラスケス、コエーリョ、聖なるムリーリョ、
彼らは金の夢の軽やかさ、冷氣と炎を作り出した。

そして、ゲーテのように穏やかなダ・ヴィンチ、夢のようなラファエロ、た
め息のようにやさしいボッティチェリは、春の突風よりやさしい。

私は夢に見た啓示の預言者たち、未来に愛されたものたち
決戦への掛け声、凱歌の旗を

超人を予兆させる、宇宙のかけら
解き明かされることのない夢の協和音を。

“Les Phares” をモチーフに据えながらも、列挙される画家たちに「超人」の予
見者という冠を与えようとしているのである。

3. ナボコフ作品における共感覚および色聴

以上の観点から、ナボコフの作品にロシア象徴派詩人の遺伝子が流れている
ことは疑いの余地がないことである。ただ、一方で、ナボコフの作品に脈打つ「共
感覚」は、ナボコフ自身が色聴の持ち主であったことによるという事実を見逃し
てはならない。そのことは先にあげた『賜物』だけでなく自伝的小説『記憶よ、
語れ！』においても詳述されるが、この自伝には英語版とロシア語版があり異同
の問題がある。英語とロシア語それぞれに色聴を持っていたことも興味深い。ま
た、あまり指摘がなされていないことがある。ナボコフが書いた最も有名な作品
『ロリータ』において、主人公ハンバート・ハンバートは、パリからアメリカに
移住し、ラムズデールという街で湖水浴を愉しみながら、フランス詩の教科書を
書くという設定になっている。（小説にはないが映画用脚本によると）ハンバー
トは、「ボードレールとポー」の講義録をテープに吹き込みながらロリータとの
邸宅内での逢瀬を楽しむのである。まさに『ロリータ』の原型には「アナベル・
リー」があり、その原型にはボードレールの影が横たわっているのである。

以上の報告の結論として言えることは、ボードレールによってフランスにも
たらされたアメリカ生まれのポーが、ロシア象徴派詩人によってナボコフの遺
伝子に受け継がれ再びアメリカに還っていくということなのである。

(創価大学)

ボードレールと中国

周氏兄弟の翻訳紹介を中心に

小川 利康

ボードレールは中国近代文学史上、主に口語自由詩（散文詩）の理論面で一定の影響を及ぼしたが、翻訳された作品が少なく、実作上の影響は限定的だった。本稿では中国近現代文学の草創期に活躍した周氏兄弟のボードレール影響受容を中心に、その一端を窺いたい。

1. 周氏兄弟について

周氏兄弟とは、魯迅（本名周樹人、1881-1936）とその弟である周作人（1885-1967）の二人を指す。浙江省紹興の没落した読書人家庭に生まれた二人は明治末期の日本に留学した。兄弟は東京での留学生活を通して、日本文学だけでなく、ヨーロッパ文学のエートスに触れ、文学者としての素養を培った。当時の日本文壇では自然主義に対抗してロマン主義が台頭しており、上田敏「海潮音」（1905年）などで象徴主義が頹廃派文学として翻訳紹介されていた。兄魯迅は独語、日本語に、弟周作人は英語、日本語にそれぞれ堪能だったが、二人とも仏語はできず、翻訳で読んだと考えられ、魯迅は当時翻訳では唯一の全集（独訳版5巻）を購入していたことが確認できる¹。詳細は確認する術がないが、邦訳も読んでいたと思われる。

周氏兄弟は留学から帰国後、五・四文化運動期（1916～1921年）において中国近代文学の黎明を告げる口語文学運動を唱導した。魯迅は「狂人日記」（1918）、「阿Q正伝」（1921）など主に小説創作方面で活躍し、周作人は「人間の文学」（1918）、「平民の文学」（1919）など主に文学理論方面で活躍した。また二人とも口語自由詩も手がけ、その理論的裏づけをヨーロッパ、日本に求めた。

2. 周作人とボードレール

¹ 『魯迅手蹟和蔵書目録』（全3巻、北京魯迅博物館1959年）によると、マックス・ブルンス（Max Bruns）による独訳版全集3巻（Max Bruns, *Werke in deutscher Ausgabe, Bd. 1, Novellen und kleine Dichtungen in Prosa*, Minden: Westf, 1904）を晩年まで所蔵していた。独訳版書誌についての考証は拙論「周氏兄弟とボードレール—散文詩『パリの憂鬱』翻訳をめぐる—」（『アジア評論』創刊号、芳草社2020年）参照。

1917 年より北京大学に迎えられた周作人は「欧州文学史」を担当した。講義ではヨーロッパ文学思潮を、古代ギリシャ・ローマから説き起こし、近世を経て、最終章では当時最新の思潮として 19 世紀末の「高踏派」を紹介するなかでボードレールも取りあげている。

ボードレール、人生を愛重し、美と幸福を慕うは伝奇派詩人と異ならず。唯だ幻滅の時代に際し、絶望の哀しみ、愈益深切なるも、而るに現世に執着せること又特に堅し。理想の幸福は、既に致す能わず、復た世を遺（わす）れ以て安息を求めるも肯んぜず。故に唯だ生を求むるに努力し、苦中に樂を得んと欲し、悪と醜の中に善と美を得んと欲し、以って樂事を媮（ぬす）むは、蓋し其れ悲痛なり。此れ所謂近代人の悲哀にして、ボードレール蓋しこれを先に受くるなり（原文が古典中国語のため書き下し文で訳した。下線部は小川による）²。

この記述がおそらくボードレールに関する中国での最も早い紹介であろう。この講義準備のため、周作人は東京で購入したヴェルレーヌ、ボードレールの英訳詩集を参照しているほか、堀口大学『昨日の花』（1918 年）にも目を通して³いる。ただし、上掲のボードレール評価は周作人独自の作品理解に基づくものではなく、さまざまな文献を渉猟して執筆したとみられる。下線部の「近代人の悲哀」は、日本の英文学者厨川白村（1880-1923）が『近代文学十講』（1912 年）で展開した文学史観に依拠している⁴。

厨川は今日でこそ忘れられているが、当時文芸批評家として有島武郎と人気を二分する存在だった。東京帝大で英文学を専攻し、小泉八雲、夏目漱石に師事、早世した上田敏の後任として京都帝大に迎えられたが、1923 年に関東大震災に遭い、津波で亡くなった。未完の遺稿『苦悶の象徴』は「近代人の悲哀（苦悶）」を精神分析学の視点から論じた文学評論である。没後刊行されると、中国では魯迅によって翻訳され、広く読まれた。

周作人は帰国まもない 1913 年 8 月に『近代文学十講』を初めて読み、「近代人の悲哀（苦悶）」という概念とともにボードレールの影響を受容したと考えられる。なかでも頽廢派（デカダン）こそが「近代の悲哀」を最もよく体現しているという厨川の見解に共鳴した。たとえば、

² 周作人「近代欧州文学史」（団結出版社 2007 年）P.229。

³ 『周作人日記』（大象出版社 1996 年）によれば、1917 年 11 月 26 日に紹興の実家から英訳詩集を取り寄せ、1919 年 3 月 19、22 日に『昨日の花』を借覧した記述がある。

⁴ 拙論「五四時期の周作人の文学観」（『日本中国学会報』第 42 集、1990 年）参照。

一方には心的生活の苦痛と、他方には肉的生活の欲望と、この二つの素因が相合してここに出来たのが即ち所謂デカダンの徒である。……何だかこう死ぬに死なれず、逃れるに逃れられないような苦しい端目に陥ったのが即ちデカダンである。つまらぬとは思いながら、猶現在の生に執着して行くところに彼等の言うべからざる深い悲愁がある。（『近代文学十講』「第四講近代の思潮（其二）三近代思潮と文芸」）⁵

厨川によれば、生存競争の激しい近代社会で精神は抑圧され、苦痛に喘ぐ一方で、内面的には亢進する性欲の衝動に苦しみ、相矛盾する葛藤が「近代の悲哀」であるという。ボードレールはその悲哀を体現する頽廃派の筆頭に挙げられる。周作人は評論「三人の文学家の記念」（1921年11月）でも講義録を引用しながら次のように述べる。

彼（ボードレール）の容貌にも似た頽廃は実は猛烈な生を求める意志の現れで、東方風の泥酔した暇つぶしの生活とはまったく異なるのだ。いわゆる近代人の悲哀とは、猛烈な生を求める意志と現在の思うに任せぬ生活との葛藤なのだ。（傍線は小川による）⁶

このボードレール評価に裏づけられた「近代の悲哀」は1921年以降の周作人の文学論において重要な意味を持つ⁷。厨川はボードレールを「近代の神秘象徵詩派の始祖」として「歐洲の近代的詩人にして、直接に或は間接に、かれの流を汲まない者は殆ど一人もない」⁸と高く評価し、とりわけ口語自由詩を創出した功績を強調する。

象徴派の詩歌に就いて、なお一つ特筆大書すべき事は自由詩である。昔から詩といえはみな平仄とか押韻とかを大切にされたものであるが、近代には一切そういう制約を無視し、有形の律格によらずして、却って一種微妙な言語の音楽によって、直接に詩人が内部生命の脈拍鼓動をそのまま伝えようとする散文詩が起ったのだ。（「第九講 非物質主義の文藝（其一）四耽美派と近代の詩人」）⁹

⁵ 『近代文学十講』（大日本図書 1912 年）P.160-161.

⁶ 『周作人散文全集』（広西師範大学出版社 2009 年）P.476.

⁷ 拙著『叛徒と隠士』（平凡社 2018 年）「第三章 失われた「バラ色の夢」—『自分の畑』における文学観の転換」で詳論した。

⁸ 『近代文学十講』P.507.

⁹ 『近代文学十講』P.513.

ヨーロッパ文学の最も新しい思潮の源流にして、「詩人内部生命の脈拍鼓動をそのまま伝える」散文詩を生み出した存在という評価は周作人だけでなく、魯迅にも大きな影響を与えた。

3. 周氏兄弟と散文詩

1917 年、中国では胡適、陳独秀らにより文学革命が提唱された。文語を棄て、平易な口語による文学を生み出す運動だった。周氏兄弟もその運動の中心となった雑誌『新青年』のメンバーに加わった。新たな文学には小説のみならず、詩歌も含まれる。だが、元代以降徐々に文語から白話（口語）小説へと段階的に発展した小説に対し、詩歌は紀元前以来の文語詩の規範を連綿と維持しており、そのくびきから脱するのは容易ではなかった。押韻は文語の語彙を前提とし、作詩するには漢魏六朝から唐宋を経て、元明清に至るまでの膨大な作品に基づく典故に熟知せねばならない。文語を棄てるとなれば、押韻による音楽性、典故による多義性がもたらす深い含蓄を断念せねばならない。その魅力をよく知る読書人ほど口語自由詩には否定的だった。そのなかで敢えて散文詩を選びとったのが周作人と魯迅であり、その決意はボードレールの散文詩と厨川の文芸論に裏打ちされていた。

中国近代文学で最もよく知られる散文詩「小河」（1919 年 1 月）には次のような前書きがある。

ある人が私に訊いた。この詩はどんな形式なのかと。私自身も答えようがない。フランスのボードレールが提唱した散文詩に少し似ているが、彼は散文体で書き、私は一行ずつ分かち書きしている。

自ら述べるとおりの「小河」は分かち書きの体裁ながら押韻のない口語自由詩である。伝統詩のような音楽性はないが、童話のような語り口には独特のリズム感がある。穏やかな語り口により、洪水を恐れる稲草や桑樹に仮託して、暴力革命への憂慮が語られている。当時周作人はロシア 11 月革命（1917 年）勃発を目の当たりにして、暴力革命を回避するためには、日本の「新しき村」運動を中国でも広げるべきだと考えていた。

このような危機感や伝統定型詩の語彙や典故では表現できなかった。「小河」は民衆に潜む暴力性を河の流れに喩える巧みな語り口で同時代の読書人の心を強くとらえ、韻律や典故がなくても詩として成立することを証明してみせた。そして、現実には作品の後を追うように発表 4 ヶ月後には北京を起点として五・四運動が勃発し、暴動は見る間に中国全土に広がった。「小河」はその予見性ととともに草創期の口語詩を代表する金字塔となった。

周作人はこの後も「夏夜夢」(散文詩 10 篇 1922 年)など多数の散文詩を発表し、1920 年代前半は理論面で口語詩創作をリードしたが、詩集『過去の生命』(1929 年)を最後に口語自由詩の創作の筆を断った。同じ頃、魯迅もまた「自言自語」(散文詩 7 篇 1919 年)を発表した。後年の散文詩集『野草』(1927 年)につながる実験的な試みであるが、難解であるためか、余り研究されていない。

周作人は 1921 年 11 月に散文詩集『パリの憂鬱』から「外方人」,「狗与瓶」,「頭髮里的世界」,「你醉」,「窗」,「海港」(それぞれ邦題は「異邦人」,「犬と香水瓶」,「髪の中の半球」,「酔え!」,「窓」,「港」)6 篇を、1922 年 4 月に「窮人的眼」,「月的恩惠」(「貧しい者たちの眼」,「月の恵み」)2 篇を発表しているが、基本的にアーサー・シモンズの翻訳に拠りつつ、独訳を参照したものである¹⁰。

このうち「窗」は厨川白村が『苦悶の象徴』(「7. 鑑賞論」)で引用し、作中で描かれる想像力のありようは、文学作品鑑賞における読者と作品の構造を解き明かすものだとして絶賛しており、周作人もまた感銘を受けたために翻訳したものと考えられる。

魯迅は厨川の没後、『苦悶の象徴』を読み、精神分析学を取り込んだ文芸論に感銘を受けて翻訳を中国で刊行した。文中に含まれる「窗」も独訳を別途参照し、フランス語原文に通ずる友人にも依頼して翻訳を行っている。同年に刊行された散文詩集『野草』は厨川流の精神分析学とボードレールの影響が看取される先駆的な象徴主義散文詩として中国では高く評価されている¹¹。

(早稲田大学)

¹⁰ Arthur Symons, *Poems in prose from Charles Baudelaire* (London: E. Mathews, 1905), Max Bruns, *Werke in deutscher Ausgabe, Bd. 1, Novellen und kleine Dichtungen in Prosa* (Minden: Westf., 1904).

¹¹ 『野草』に関する近來の優れた研究として秋吉収『魯迅—野草と雑草—』(九州大学出版会 2016 年)があり、ボードレールとの関係についても詳論されている。

19 世紀フランスにおけるロラン夫人像

ラマルティエヌ, ミシュレ, サント=ブーヴ

中里 まき子

1. はじめに

20 世紀末以降、文学において、また文学を含む人文学において、記憶や、記憶の継承のための証言といった主題が人々の関心を集めている。ピエール・ノラ監修の『記憶の場¹』の試みに続いて、近年ではアンリ・ルソー『過去と向き合う²』などが集合的記憶の問題を扱っている。また、文学創作としては、パトリック・モディアノ『ドラ・ブリュデール³』やヤニック・エネル『ヤン・カルスキ⁴』などが記憶の継承を主題として書かれ、多数の読者を得た。

こうした記憶への関心を背景として、フランス革命期の人物であるロラン夫人に着目した場合に浮かび上がってくるのが、生前の活動の規模に対して、革命後の記憶の継承における存在感が非常に大きく、まるで死後に新たな生命を授かったように見えることである。

ジロンド派内閣で内務大臣を務めたロランの妻、ロラン夫人は、同派の黒幕とみなされていたため、敵対するモンターニュ派によって排斥され、処刑された。しかしその後、革命の立役者として崇敬を集め、彼女が処刑前に獄中で綴った回想録は 19 世紀を通して多数の版を重ねた⁵。大臣の妻にすぎなかったロラン夫人が死後にシンボル化されたことの要因として、確かに彼女が残した回想録の魅力を描き出すことはできるが⁶、本当にそれに尽きるのか。

¹ Pierre Nora (dir.), *Les Lieux de mémoire*, Paris, Gallimard : t. 1, La République, 1984 ; t. 2, La Nation, 1986 ; t. 3, Les France, 1992.

² Henry Rousso, *Face au Passé. Essais sur la mémoire contemporaine*, Paris, Éditions Belin, 2016.

³ Patrick Modiano, *Dora Bruder*, Paris, Gallimard, 1997.

⁴ Yannick Haenel, *Jan Karski*, Paris, Gallimard, 2009.

⁵ Louis Bosc 版(1795), L.-A. Champagneux 版(1800), Berville et Barrière 版(1820), J. Ravenel 版(1840), C.-A. Dauban 版(1864), M.-P. Faugère 版(1864), Jules Claretie 版(1884), Claude Pérroud 版(1905) 等。

⁶ ベアトリス・ディディエは、革命期の 10 年間に個人的な著述が豊富に生み出されたこと、そこにルソーの自伝『告白』の影響が見られることを指摘した上で、特に興味深い 3 人の書き手のひとりとしてロラン夫人を紹介する。Béatrice Didier, *La Littérature de la Révolution française*, Paris, Presses universitaires de France, « *Que sais-je ?* », 1988,

革命後 200 年を経ても、複数の出版物がロラン夫人に捧げられているが、それらは生前の彼女に焦点を当てたものであり⁷、この人物の記憶が、死後、いかに継承されたかを俯瞰する試みは管見の限りなされていない。そこで本稿では、ジャンヌ・ダルクの記憶を検討したミシェル・ヴィノックの手法に倣い⁸、革命に続く時代に、ロラン夫人の記憶が想起され、継承された状況と背景について、その一端を明らかにしていく。

2. ロラン夫人の生涯

それに先立ってこの人物の生涯を、本稿の内容に関わる事項に絞って紹介する⁹。

後のロラン夫人、マリー＝ジャンヌ・フリポンは 1754 年 3 月 17 日、パリのプチ・ブルジョワ家庭に生まれる。父は彫版師である。1765 年 3 月から一年間、初聖体拝領の準備のため修道院で過ごす。しかし 1775 年にはカトリック信仰に疑問を持ち、不信仰者になったとされる。また同年、母が病死するとマリー＝ジャンヌは大いに落胆し、病床に伏してしまう。その後、1776 年 1 月に手工業監督官ジャン＝マリー・ロラン・ド・ラ・プラティエールと出会い、1780 年 2 月に結婚。1781 年 2 月、2 人はアミアンに居を構え、10 月に娘のマリー＝テレーズ＝ウードラが誕生する。

1789 年に革命が勃発すると、ロラン夫妻は第三身分による闘争を支持するが、彼らがパリに移るのは 1791 年 2 月のことである。ロラン夫人のサロンにはジャコバン派の議員やジャーナリストが集い、1792 年 3 月にジロンド派内閣が成立するとロランが内務大臣に任命される。しかしその後、九月虐殺などの暴力を目の当たりにして、彼女は革命に失望してしまう。さらに秋以降はジロンド派とモンターニュ派の抗争が激化し、ジロンド派が劣勢になっていく。そして 1793 年 6 月 1 日の早朝、ロラン夫人は逮捕され、政治犯としてアベイ監獄に収監される。6 月 24 日にサント＝ペラジー監獄に移送され、10 月 31 日にはジロンド派議員たちの処刑に続き、コンシエルジュリー監獄に移送される。11 月 8 日、死刑を宣告されギロチンにかけられる。

pp. 113-115.

⁷ 近年の出版物の多くはロラン夫人の伝記である。Menie Grégoire, *Madame Roland*, Paris, Éditions de Fallois, 2014 ; Cécile Berly, *Trois femmes : Madame du Deffand, Madame Roland, Madame Vigée Le Brun*, Paris, Passés / Composés, 2020 等。

⁸ Michel Winock, « Jeanne d'Arc », dans Pierre Nora (dir.), *Les Lieux de mémoire*, t. 3, *op.cit.*, pp. 674-733.

⁹ 主としてムニー・グレゴワールによるロラン夫人の伝記の年譜を参照した (Menie Grégoire, *op.cit.*, pp. 261-266)。

3. フランソワ・ビュゾとの恋、その隠蔽と露見

以上、便宜的に罗兰夫人の生涯を要約したが、彼女がどのように生きたのかを一面的に語るのは難しい。実際、この人物の記憶は処刑の直後からジロンド派の生き残りを中心に語られ始めたが、記憶が継承される過程で、19世紀後半に彼女の人物像に大きな転換がもたらされた。それは、罗兰夫人が年下のジロンド派議員フランソワ・ビュゾとの間に育んでいた道ならぬ恋が明るみに出されたことである。

1864年に、罗兰夫人が獄中からビュゾに宛てた手紙4通が刊行され、また、彼女の獄中記についても、それまで省かれていたこの恋に関わる記述を収録した、より完全な形の新版が刊行される。さらに1899年には、罗兰夫人からビュゾに宛てた5通目の手紙が発見される。この手紙は、罗兰夫人が偽名を使って書いたために、1864年の時点では彼女のものとは認識されていなかった¹⁰。

こうして革命から半世紀以上を経て新事実が開示されたことは、彼女の存在に新たな関心を引き起こすこととなった。本稿では、ラマルティエヌ、ミシュレ、サント＝ブーヴによるテキストを取り上げて、ビュゾとの恋が開示される前後に彼らがどのような罗兰夫人像を描き出したかを検討していくが、その前にまず、罗兰夫人自身がこの恋について書き残した言葉を読んでみたい。

罗兰夫人はジロンド派の黒幕として手腕を発揮した面もあるものの、あくまで罗兰の妻という役割に徹することを望んだ。ところが彼女は、夫罗兰を苦しめると知りながら、6歳年下のジロンド派議員フランソワ・ビュゾを愛することになってしまう。そしてある日、彼女はビュゾへの想いを、相手が誰であることを伏せつつ夫に打ち明ける。その時の状況が、獄中で綴られた回想録に書き記されている。

私は、繊細な娘が徳高い父親を敬愛し、恋人までも犠牲にするように、夫を尊敬し、慈しんできた。でも私は、恋人となりえる男性と出会ってしまったのだ。自分の義務に忠実である私は、率直さゆえに、感情を隠すことができなかった。愛情についても自尊心についても過度に敏感な夫は、自分の支配権が少しでも損なわれるという考えに耐えられなかった。夫は暗い妄想を膨らませ、夫の嫉妬は私を苛立たせた。幸福は私たちから遠く逃げ去った。夫は私を愛し、私は夫に献身した。私たちは不幸だった。もし私が自由の身であれば、心痛を和らげ、老いを慰めるためにどこへでも夫について行くでしょう。私のような魂の持主は、決して犠牲を不完全なものとはしないのです¹¹。

¹⁰ Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, publiés par Claude Pérroud, Paris, Plon, 1905, p. 369, note 1.

¹¹ Madame Roland, *Mémoires de Madame Roland*, édition publiée avec des notes par C.-

この引用箇所は、19 世紀前半までに刊行されたロラン夫人回想録においては省かれており、1864 年刊行のシャルル=エメ・ドーバン版に初めて収録された。

また、彼女が処刑される 20 日ほど前、1793 年 10 月 18 日に書いた「最後の断想」には、愛するビュゾへの呼びかけと思われる次の段落が含まれるが、その箇所には書き手自身によって抹消線が引かれており、やはり回想録の当初の版では省かれていた。

そして、名を記すことのできないあなた！ いつの日か、人々が私たちの不幸に同情する時、その人となりによりよく知られるであろうあなた。どんな激情によっても美德の柵を越えることのなかったあなた。私たちが咎められずに愛し合える場所へ、私たちの結びつきが妨げられない場所へ、私が先に向かうことによってあなたは心を痛めるでしょうか。——そこでは厭わしい偏見も、故ない排斥も、憎悪の念も、あらゆる横暴も沈黙します。私はそこであなたを待ち、休んでいようと思います。誠実さに開かれた隠れ家がひとつでもあるなら、この世にとどまってください。あなたを排斥した不正を告発するために。でも、もし運悪く敵が執拗にあなたを追い回すなら、金で雇われた誰かがあなたを殺すのを待たずに自由なまま死んでください。自由に生きたように¹²。

このような、当初は省かれていた、ビュゾとの恋に関わる獄中紀の記述が開示されるのと並行して、1864 年に、ロラン夫人が獄中からビュゾに宛てた手紙 4 通も出版され、2 人の恋の実像が明らかになる。1793 年 6 月 22 日の手紙を引用する。

私が逮捕されることによって、R [ロラン] に対する彼らの憎しみが和らぎ、非難が弱まるだろう、なんて思っていました。もし彼らが私を裁判にかけるなら、私は夫の栄光に資する方法で立ち向かいましょう。そうすれば、夫に与えた苦痛への償いができると思いました。でも、ひとりでいることによって、私と一緒にいるのは、あなたなのだとも思いませんか？ ——こうして囚われの身でいれば、私は夫に自分を捧げ、愛する人にこの身を結びつけることができます。死刑執行人たちのおかげで、義務と愛とを両立させることができます。だから私に同情しないでね！ ——人々は私の勇氣に感心しています。でも彼らは私の歓びを理解していません。私の歓びを感じているはずのあなた、その

A. Dauban, Paris, Plon, 1864, pp. 172-173. Elibron Classics Replica の複写版を参照。

¹² *Ibid.*, pp. 390-391.

魅力が保たれるよう、勇気を持ち続けてください¹³.

この手紙にあるように、ロラン夫人は、自分が捕まってモンターニュ派の憎悪を背負うことにより、夫ロランへの攻撃が弱まれば、ビュゾとの関係のせいで夫に与えた苦痛に対する償いができ、さらに、ひとりで牢屋にいるほうが精神的にはビュゾと共にいられると考えていた。

こうして 1864 年にビュゾとの恋が露見したことによってロラン夫人像に転換がもたらされたわけだが、その前後に発表されたラマルティエヌ、ミシュレ、サント＝ブーヴの著作において彼女はどのように描かれているだろう。また、彼らのロラン夫人像はいかなる文化的・社会的状況を背景とするのか。3 人の作家が提示したロラン夫人については、ジタ・メイによる大局的な視点からの紹介があるが¹⁴、以下では、(a) ロラン夫人の功績と魅力、(b) ビュゾとの恋、(c) 死の場面という 3 項目に着目して、より具体的に検討していく。

4. ラマルティエヌ『ジロンド党史』

4 (a) ロラン夫人の功績と魅力

ビュゾとの恋が露見する前、1847 年に刊行されたラマルティエヌの大著『ジロンド党史』においてロラン夫人に割かれたページはそれほど多くないものの、彼女は、先駆的な共和主義者として、また革命を体現する存在として賞賛されている。まず、シャルル・フランソワ・デュムリエ將軍の視点から、「若く、美しく、雄弁な¹⁵」女性として提示された後、ジロンド党员シャルル・バルバルーがロラン宅を訪れる場面では、連邦主義共和国という概念が生まれたのは、バルバルーが、夫ではなくロラン夫人と初めて会見した時であったとされる¹⁶。そして獄中のロラン夫人については、「彼女の衝動、情熱、幻想、受難、目下の落胆、そして不屈の希望において、独房に押し込められた彼女は、革命のすべてを体現

¹³ « Lettre de Madame Roland à Buzot, le 22 juin 1793 », dans *Des lettres de Madame Roland à Buzot et d'autres documents inédits*, C.-A. Dauban (éd.), Paris, Plon, 1864, p. 20. 1864 年にドーバンはロラン夫人回想録の新版、及び、ロラン夫人からビュゾへの手紙 4 通を刊行した。ドーバンによると、手紙 4 通はある若者によって 1863 年 11 月末にパリのヴォルテール河岸の書店に持ち込まれ、売却された。手紙は若者の父親が所持していたものだが、彼は父親から手紙の内容や入手した経緯を聞いたことはなかった (*ibid.*, pp. 1-2)。

¹⁴ ジタ・メイは、ラマルティエヌとミシュレがロラン夫人を過度に理想化しているとする一方で、サント＝ブーヴは 19 世紀の他の書き手より複雑で深みのあるロラン夫人を描いたとする (Gita May, *De Jean-Jacques Rousseau à Madame Roland*, Genève, Droz, 1974, pp. 17-19)。

¹⁵ Alphonse de Lamartine, *Histoire des Girondins* [1847], Paris, Robert Laffont, 2014, p. 430.

¹⁶ *Ibid.*, p. 491.

していた¹⁷⁾と述べられる。

4 (b) ビュゾとの恋

ビュゾとの恋に関しては、ラマルティエヌはロラン夫人がこのジロンド党員に特別な愛情を注いでいたことを知っていて、数回にわたり言及している（「党以上にこの若い女性に愛着を持っていたビュゾは、彼女にとって友人であったが、他の者たちは部下あるいは共犯者にすぎなかった¹⁸⁾」）。

そして、2 人の関係に最も踏み込んだ次の記述を読むと、ロラン夫人の恋が詳細に開示される 1864 年以前も、多少は知られていたことがわかる¹⁹⁾。

ロラン夫人はビュゾを愛していた。ビュゾは彼女を、靈感を与える女性、偶像として崇拝していた。おそらく彼らは互いの気持ちを言葉で告白し合うことは決してなかったことだろう。その気持ちが罪深いものとなった暁には、彼らにとって神聖さが減じられたことだろう。しかし彼ら自身が互いに隠していたことを、死に際して心ならずも明かしてしまった。この男、そしてこの女の最後の数日、最後の数時間に、死を前にした溜息、仕草、言葉が、生に含まれた秘密を漏らしてしまう。しかしこうして露呈した秘密も、彼らの気持ちの神秘を明け渡しはしない。後世はそれを垣間見ることはできるが、非難することはできない²⁰⁾。

ラマルティエヌはロラン夫人回想録についても、後世の人々に宛てているように見せつつ、実際にはある腹心の魂に語りかけたもので、言わば「声を潜めた会話²¹⁾」であると捉えている。

4 (c) 死の場面

続いてこの著作におけるロラン夫人の死の場面を読みたい。死刑判決を下されたロラン夫人は、ラマルシュという罪人と 2 人でギロチンのある革命広場まで護送され、ロラン夫人が先に処刑される予定であった。そのとき彼女は、残酷な処刑を間近で見せるのは忍びないということで、ラマルシュの処刑を先にするよう死刑執行人に頼んだことが語られた後、次の段落が続く。

¹⁷⁾ *Ibid.*, p. 1688.

¹⁸⁾ *Ibid.*, p. 492.

¹⁹⁾ ロラン夫人とビュゾとの関係をラマルティエヌがどのような経緯で知ったのかは不明である。しかし、19 世紀中頃には革命の生き証人から情報を得られたことや、現代には伝わっていない刊行物等が存在したことが考えられる。

²⁰⁾ *Ibid.*, p. 493.

²¹⁾ *Ibid.*, p. 1690.

ラマルシュが処刑され、それが引き起こした衝撃音を顔色も変えずに聞いた後、彼女は死刑台の階段を軽やかに上った。そして自由の女神像の方に身を屈め、なおも自由のために命を捧げようというこの時、自由に懺悔させようとでもいうように、「ああ、自由よ！」彼女は叫んだ。「ああ、自由よ！ おまえの名のもとに、どれほどの罪が犯されることか！」彼女が死刑執行人に身を任せると、その頭が籠の中に転がり落ちた²²。

『ジロンド党史』については、ゾラ『居酒屋』において登場人物ランティエが分冊の配本を所有していたという記述があり²³、19 世紀に一定の読者を得ていたものと考えられる。

5. ミシュレ『フランス革命史』

5 (a) ロラン夫人の功績と魅力

ミシュレが数年かけて執筆した『フランス革命史』もまた大著であるが、ロラン夫人にはプレイヤッド版で 10 ページ程度のひとつの章が充てられ、さらに「ジロンド派の死」と題された別の章において彼女の死が簡潔に語られるのみである。それでも、共和国をつくりあげるには「魂の若さ²⁴」が必要であると考えていたミシュレは、ロラン夫人を、生まれたばかりの若々しい精神を宿した人物として賛美している。

彼女がパリに到着したのは 1791 年 2 月、共和国の問題が持ち上がる重要な時期の前夜であった。彼女は 2 つの力をもたらした。美德と情熱である。その時まで人里離れた地で大事件に備えていた彼女は、精神の若さ、新鮮な思想、感性、感情をもって現れ、疲れ果てた政治家たちを若返らせた。政治家たちはすでにくたびれていた。そして彼女は、この日生まれたばかりであった²⁵。

ミシュレは、彼女が 39 歳で処刑される時まで若さを保ったことを目撃者の証言として伝えている。

コンシエルジュリで彼女を目撃した人々は、彼女がいつも美しく、魅力的で、

²² *Ibid.*, p. 1698.

²³ Zola, *L'Assommoir* [1876], Paris, Gallimard, 1978, p. 293.

²⁴ Jules Michelet, *Histoire de la Révolution française* [1847-1853], I, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2019, p. 664.

²⁵ *Ibid.*, p. 673.

39 歳でも若々しかつたと述べる。力強い完全なる若さ、秘められた無尽蔵の生命力が、彼女の美しい眼差しから迸っていた²⁶。

5 (b) ビュゾとの恋

ビュゾとの恋については、ミシュレは、ロラン夫人に夫以外の恋人がいたことは知っていたが、その相手はフランソワ・ビュゾではなく、ロランと共同で結社を興そうとしたバンカル・デ・ジサールであると考えていた。年配のロランが、妻が愛する年若い男を信頼し、交流していた状況を、ミシュレはルソー『新エロイズ』に重ねている。

この状況は、危険でないとしても、少なくとも張り合いや波乱をはらむものであった。それは、ジュリのそばにサン＝プルーを呼び寄せたヴォルマールであった。メイユリの岩場で危機に瀕する小舟であった。難破を免れたとしても、漕ぎ出さないほうがよかった²⁷。

ロラン夫人がルソーの愛読者であったことも、彼女と夫の関係を『新エロイズ』のジュリと夫ヴォルマールに重ねる見方を誘発するが、すでに引用したロラン夫人の記述からは、ヴォルマールと違ってロランは、妻の恋を寛大に受け入れることはなかったことがわかる。このように『フランス革命史』のロラン夫人像は、実態と乖離した部分もあるものの、ミシュレの筆致により大変印象的なものとなっている。

5 (c) 死の場面

最後に死の場面を読んでみよう。ミシュレはロラン夫人と共に処刑された罪人ラマルシュの存在には触れずに、彼女の死を簡潔に記している。

彼女が死んだ 8 日は、11 月としては寒い日であった。殺風景で陰鬱な自然が心の状態を映し出していた。革命もまた、幻想が死滅した冬の時代へと沈み込んでいた。夜の帳が下りる頃（5 時半）、彼女は、葉の落ちた 2 つの公園の間の、オペリスクが建つ広場に着いた。処刑台のそばに据えられた巨大な自由の女神像の下に。彼女は軽やかに階段を上った。そして女神像に振り向き、語りかけた。咎める口調ではなく、厳かな優しさを込めて。「ああ、自由よ。おま

²⁶ Jules Michelet, *Histoire de la Révolution française* [1847-1853], II, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2019, p. 742.

²⁷ Jules Michelet, *Histoire de la Révolution française* [1847-1853], I, *op.cit.*, p. 671.

えの名のもとに、どれほどの罪が犯されることか²⁸！」

* * *

ラマルティエヌとミシュレのロラン夫人像は、恋の相手として想定された人物が異なるものの、大枠では類似している。ミシュレの『フランス革命史』は共和国の誕生を謳い上げる歴史書であるため、ロラン夫人を共和国に貢献したヒロインとして理想化するのは当然である。一方ラマルティエヌは貴族出身であるが、1848年の二月革命後、臨時政府で外務大臣を務め、同年12月には大統領選挙に立候補してルイ・ナポレオン（ナポレオン3世）に敗れるという経緯を辿った。『ジロンド党史』に序文を寄せたモナ・オズーフは、ラマルティエヌの作品執筆の意図について述べている。

人類は、光、正義、慈愛に向かって進んでいるように彼〔ラマルティエヌ〕には思われる。抵抗しても馬鹿を見るだけの、有無を言わさぬ動きによって。彼はこの確信ゆえに、王党派の友人たちに、アンシャン・レジームは死んだことを無視できない現実として受け入れるよう説き聞かせる²⁹。

ラマルティエヌとミシュレのロラン夫人像には、旧体制への回帰を望む王党派が一定の割合を占め、政治的に不安定なフランス社会において、人々の心を共和国の側に引きつけようとする書き手たちの想いが映し出されている。

6. サント=ブーヴ『新月曜閑談』

上記2人の場合とは違い、サント=ブーヴが『新月曜閑談』に発表したロラン夫人をめぐる文章は、書評の形をとっている。それは、1864年にシャルル=エメ・ドーバンがビュゾとの恋に関する記述を復元して刊行したロラン夫人獄中記の新版、及び、やはりドーバンが編纂したロラン夫人からビュゾへの手紙4通を対象として書かれた大部の書評で、『新月曜閑談』の3号（1864年7月4日号、11日号、18日号）にわたって発表された。よって、詳細が露見したばかりのロラン夫人の恋が、サント=ブーヴの執筆の契機にあったと言える。実際、彼は文章の冒頭で「ロラン夫人についてはすべてが言い尽くされたと考えられて

²⁸ Jules Michelet, *Histoire de la Révolution française* [1847-1853], II, *op.cit.*, p.742.

²⁹ Mona Ozouf, « Préface », dans Alphonse de Lamartine, *op.cit.*, p. XX.

いた³⁰」が、彼女の恋を暴露する新たな出版によって「一連のラッパの音³¹」が鳴り響いたと記している。

6 (a) ロラン夫人の功績と魅力

こうした執筆の状況を反映するように、サント=ブーヴはロラン夫人を革命の立役者や共和国の象徴としては捉えていない。彼はロラン夫人が友人たちに宛てた手紙を引用し、その文学的価値を称揚しつつ、彼女を「ブルジョワのセヴィニエ夫人」や「セヴィニエ・ジョルジュ・サンド」と呼んでいる³²。また、1864年に刊行されたばかりのロラン夫人からビュゾへの手紙4通については、「文学界にとって計り知れない収穫」であると述べ³³、それが「ヴォルマール夫人の言い回し」を思わせる「コルネイユ的文体」で書かれていると指摘する³⁴。ヴォルマール夫人とは『新エロイズ』のジュリのことなので、ミシュレ同様サント=ブーヴもルソーに言及していることになる。これは、19世紀フランスにおけるルソーの存在感を示す証左である。

6 (b) ビュゾとの恋

ビュゾとの恋に関しては、この時点ですでに実態が開示されていたため、サント=ブーヴはロラン夫人の恋が約半世紀にわたってどのように隠され、また、どういった経緯で露見するに至ったかを説明し、考察している。

サント=ブーヴの説明によると、まず、この恋が隠蔽された背景にロラン夫妻のひとり娘ウッドラの存在がある。ロラン夫人は1793年11月8日に処刑され、その後、妻の死を知った夫が自ら命を絶つ。翌年、1794年7月27日にテルミドール9日のクーデタでロベスピエールが失脚すると、そのわずか一年後の1795年夏にロラン夫人獄中記が友人ルイ=オーギュスタン・ボスクによって刊行される。これほど出版が急がれたのは、両親の財産を没収されたウッドラ・ロランを経済的に支援する目的があったためである³⁵。まだ14歳の少女のための出版であるからこそ、編者は「あまりに生々しく赤裸々な打ち明け話」を省かなくてはならなかった³⁶。

そして、ビュゾへの恋が露見した経緯において鍵を握るのもやはりウッドラ

³⁰ Sainte-Beuve, « Madame Roland » [1864], *Nouveaux Lundis*, tome 8, Paris, Michel Lévy frères, Librairies éditeurs, 1867, p. 190.

³¹ *Ibid.*, p. 192.

³² *Ibid.*, p. 231.

³³ *Ibid.*, p. 248.

³⁴ *Ibid.*, pp. 212-213.

³⁵ *Ibid.*, p. 192.

³⁶ *Ibid.*, p. 193.

である。彼女は、ロラン夫人獄中記の初版が刊行されて以来、母の手稿を手元に置いていたが、1846年にプロスペール・フォージェールという人物に一時的に貸し出した。初版の編纂者ボスクを大叔父に持つフォージェールは、まずは自分自身のために、既刊の獄中記から省かれていた箇所を復元した³⁷。するとそこには宗教的な考察も含まれており、ウードラを感動させた。彼女は、革命期に反カトリック政策に寄与したロラン夫人の娘であるが、革命家の子ども世代に得てして見られたように敬虔なキリスト教徒になっていた³⁸。フォージェールは、ウードラの後押しもあって、ロラン夫人獄中記の完全版³⁹を1864年に刊行する。すでに紹介したドーバン版と同年だが、別の版である⁴⁰。

また、フォージェールはウードラに、ロラン夫人の手稿が公的機関で保管されるべきであるという願望を伝え、実際に彼女は母の手稿を帝国図書館に寄贈することになる。寄贈がいつなされたかは不明であるが、1864年に執筆しているサント＝ブーヴは、それが「ごく最近」であったと記している⁴¹。そして寄贈された手稿に基づき、ビュゾへの恋に関する記述等を復元したドーバン版も刊行された。

ウードラが母親の手記の完全版が出版されることを望んだ背景には、母と比べて不当に軽視されていた父の復権を試み、ジロンド派を研究する歴史家たちの認識を正したいという考えもあった⁴²。しかしサント＝ブーヴにとってこの判断は、実の親を客観的に見ることのできない娘ゆえの過ちである⁴³。ロラン夫人獄中記の完全版によって夫人の道ならぬ恋を開示することは、「峻厳なロランの名」を汚すことに他ならないからである⁴⁴。

6 (c) 死の場面

ロラン夫人の死の場面については、サント＝ブーヴはフォージェールが編纂した獄中記に示された解釈を紹介し、それを批判する形で自らの考えを述べている。フォージェールはパスカルの著作の編者であり、カトリックであったと考えられ

³⁷ *Ibid.*, p. 248.

³⁸ *Ibid.*, p. 249.

³⁹ *Mémoires de Madame Roland écrits durant sa captivité*, Nouvelle édition par Prosper Faugère, Paris, Hachette, 1864.

⁴⁰ サント＝ブーヴは『新月曜閑談』1864年7月4日号の冒頭に、ドーバンがすでに回想録の新版を出版し、フォージェールも出版を予定していると記しているため、ドーバン版が先に刊行されたと考えられる (*Sainte-Beuve, op. cit.*, p. 192)。フォージェール版もまもなく刊行されたようで、サント＝ブーヴは7月18日号でこの版に言及している。

⁴¹ *Ibid.*, p. 248.

⁴² *Ibid.*, p. 251.

⁴³ *Ibid.*, p. 252.

⁴⁴ *Ibid.*, p. 253.

る。彼は、ロラン夫人の死についてもカトリック的な解釈を展開している。つまり、信仰を捨てた共和主義者と見なされていた彼女が、実際は信仰を保ち続けていて、死の間際に啓示を得たという注釈を加えているのである。サント=ブーヴはその箇所を引用する。

人々が言うには、処刑台の下に着くと [...], ロラン夫人は書くものを求めた。コンシエルジュリから革命広場への行程において彼女が得た特別な考えを書き留めるためであった。願いは聞き入れられなかった。

天の息吹が豊かに与えられたこの魂は、やはり完全に敬虔なる信仰を留めていて、おそらく最後の瞬間に超人的な光景を目の当たりにした。それは思いがけない啓示であり、永遠の生命があることの新たな論拠であった⁴⁵。

サント=ブーヴは、フォージェールによる解釈を受け入れるのは不可能であり、このような「伝説」は「伸び放題の草」であるため「根こそぎに」すべきだと述べる⁴⁶。またサント=ブーヴはこの場面について、ロラン夫人の友人シャンパニユーが、彼女の死の7年後に娘ウッドラの心を慰めるために考え出したものであることを付記する⁴⁷。先述のようにウッドラは、革命後の世代にありがちな保守反動によってカトリック教徒になっていた。

続いてサント=ブーヴは、死に臨むロラン夫人の姿をよりの確に把握するため、コンシエルジュリでの彼女を目撃した2人の人物による証言を引用する。2人のうち、自身も囚人として収監されていたオノレ・リウフェは次の証言を書き残した。

死刑を宣告された後、彼女は飲んでるように素早く覗き窓に現れた。明確な身振りで死刑宣告を受けたことを示した。同じ運命の男と一緒にされたが、その男には彼女のような気力はなかった。彼女はとても優しく飾らない陽気さで彼を励まし、何度か彼に微笑みをもたらした⁴⁸。

⁴⁵ *Cité par Sainte-Beuve, op. cit.*, pp. 254-255.

⁴⁶ *Ibid.*, p. 255.

⁴⁷ *Ibid.*, p. 260, note 1. トーマス・カーライル『フランス革命史』(1837年)にも同様の場面がある。「断頭台の下に着くと、彼女はペンと紙を求めた。「彼女のうちに湧き起こる奇妙な考えを書き留めるため」の異例の要求であるが、それは拒絶された」(Thomas Carlyle, *The French Revolution* [1837], Oxford, Oxford University Press, 2019, p. 633)。

⁴⁸ *Cité par Sainte-Beuve, op. cit.*, p. 257. サント=ブーヴが参照したのはリウフェの次の著作である。Honoré Riouffé, *Mémoires d'un détenu, pour servir à l'histoire de la tyrannie de Robespierre*, Paris, Imprimerie d'Anjubault, 1795.

サント=ブーヴは、この引用箇所に見られるような処刑直前の歓びや陽気さこそが罗兰夫人の真実であると考え、そして、当時のすべての政治家同様、革命の実現のために少しは不正に手を染めたこともある彼女は、罪の意識ゆえに、自らの血によってそれが洗い流される処刑の日を祝祭の日と捉えていた、という解釈を展開する⁴⁹。こうして、ラマルティエヌやミシュレによってなされた理想化とは一線を画する、陰影を帯びた人物像が提示される。

7. 結び

生前、名のある存在ではなかった罗兰夫人の生涯は謎に包まれているため、彼女の実像を追い求めて、数多くの著作が出版されてきた。本稿ではあえてその死後に着目し、記憶の継承に携わった3人の作家によるテキストを検討した。

罗兰夫人の記憶は、革命後の社会状況や人々の心性を反映しつつ語り継がれ、フランス人の集合的記憶の一角をなしたが、実のところその記憶は、さまざまな虚構によって増幅されたものでもある。すでに取り上げた、処刑の直前に啓示を得たというカトリック的解釈だけでなく、この処刑の場面は虚実織り交ぜて盛んに語り継がれてきた。例えば、ラマルティエヌとミシュレが共通して引用する最後の言葉（「ああ、自由よ……」）は、彼女の言葉として最も有名であるが、革命から約100年後にエドモン・ビレが批判的考察を展開している。この文芸批評家によると、処刑当時の記録には見られず、信憑性が保証されないこの発言は、ロベスピエールらモンターニュ派が失脚したクーデタ（1794年7月27日）後に、それまで抑圧されていたジロンド派の書き手たちが、テルミドール反動という文脈において罗兰夫人の言葉として考え出したものである⁵⁰。

この例が示すように、罗兰夫人ら革命の立役者たちの記憶は、革命派と反革命派の対立に加え、革命派の中にもモンターニュ派やジロンド派等による対立構造が継続する中で語り継がれたため、諸党派の対抗意識ゆえに、史実から離れた虚構が付け加わることも多分にあった。

罗兰夫人を対象とする本稿では、ほんの一端を提示したにすぎないが、新たな出版物が絶えない革命を生きた人々について、今後も記憶の継承を辿っていきたい。

（岩手大学）

⁴⁹ Sainte-Beuve, *op. cit.*, p. 258.

⁵⁰ Edmond Biré, « La Mort de Madame Roland : Samedi 9 Novembre 1793 », *La Quinzaine Revue littéraire, artistique et scientifique*, Paris, t. IX, 2^e année, 1896, p. 442, note 1. 罗兰夫人の言葉の起源を特定することはできないが、ラマルティエヌやミシュレより先にカーライルが1837年刊行の『フランス革命史』に記している。「ああ、自由よ、おまえの名のもとにどれほどのことがなされるのだろう！」（Carlyle, *op. cit.*, p. 633）。

[résumé]

Madame Roland au 19^e siècle en France Lamartine, Michelet et Sainte-Beuve

Après son exécution en 1793, Madame Roland est devenue une des figures symboliques de la Révolution. Cependant, son image s'est beaucoup dégradée en 1864 lorsque les rapports intimes entre elle et François Buzot ont été révélés par la publication de ses lettres d'amour et par les nouvelles éditions augmentées de ses *Mémoires*.

Avant même cette révélation, Lamartine et Michelet, dans leurs ouvrages respectifs, avaient fait allusion à l'amour secret de Madame Roland, mais leur intention était plus essentiellement de tracer son portrait comme une protagoniste, belle et perspicace, de la Révolution et de la République. Puis, à la suite de la révélation de 1864, Sainte-Beuve écrit dans un compte rendu qu'il est fasciné par son talent d'écriture qu'il perçoit dans ses lettres d'amour. Sainte-Beuve n'a plus l'intention d'idéaliser le rôle de Madame Roland dans la Révolution, mais il écarte tout de même une interprétation catholique de sa mort, ajoutée dans une nouvelle édition de ses *Mémoires*.

Le nom de Madame Roland a souvent été évoqué au 19^e siècle en France car les républicains et les catholiques, qui s'opposaient toujours, se disputaient la mémoire de cette femme.

Makiko Nakazato
Université Iwate

* 本稿は、日本学術振興会・2021年度科学研究費助成事業（基盤研究C）「罗兰夫人の記憶の継承に関する研究」（課題番号 20K00488 研究代表者・中里まき子）の研究成果の一部である。

世紀末小雑誌からみる前衛の制度化の試み

— 『プリューム』の「タベ」と若手グループの誕生 —

合田 陽祐

I. はじめに

十九世紀後半のパリの文学場では、アカデミーなど既存の制度から独立した小規模な文学グループが相次いで発足した。有名なものに、パルナス（高踏派）やメダンのグループ、マラルメの火曜会やゴンクールの屋根裏会がある。前者二つは書物の出版を契機に形成され、後者二つはサロンの社交の雰囲気をもった自由な集合体である。ただし、こうした 1860 年代から 80 年代までのグループの知名度の高さに対し、1890 年前後に誕生したグループは、その重要性に比して我が国では検討されてこなかった¹。

1890 年代は「小雑誌」(*petite revue*) と呼ばれたメディアの全盛期である。本小論では、有力な小雑誌の一つ『プリューム』誌を取りあげ、同誌が主催した文学系の定期イベントを検討する。あらかじめ要点を示すと、『プリューム』は若い書き手を支援するために、『プリューム』の「タベ」なるイベントを組織した。その参加者を中心とする前衛グループは、(1) 定期刊行物を媒介とし、(2) 党派性を嫌悪する折衷主義的な傾向が強く、(3) 編集部によって組織されていた点に特徴がある。これは従来の文学グループが偶発的・自然発生的であったのとは対極的である。以下で明らかにするように、同誌が主催した定期イベントは、一方では才能ある若手の庇護と発掘、育成のための機関としての役割を担い、他方では若い作家の「連帯」と「友愛」の場として機能した。本稿では若手グループの形成に多大な貢献をしたこの『プリューム』の初代編集長レオン・デシャン(1864～1899)の卓越した手腕についても、当時の証言を交えながら確認していくことにしたい。

II. 『プリューム』の折衷主義と思想的中立

まず小雑誌の歴史を簡潔に振り返っておこう。小雑誌とは 1880 年代中盤に現れた、若い出版のアマチュアたちが手がけた定期刊行のメディアを指す。レミ・

¹ フランスでは十九世紀文学史をセナークルの歴史として捉え直す次の大部の研究書の出版が話題を呼んだ。Anthony Glinoe, Vincent Laisney, *L'Âge des cénacles. Confraternités littéraires et artistiques au XIX^e siècle*, Fayard, 2013.

ド・ゲールモンが 1900 年に著した『小雑誌 書誌の試み』によれば、1885 年から 1900 年までに、フランスでは 130 もの雑誌と新聞が創刊された。この急激な伸びは、1881 年の出版自由法 (Loi du 29 juillet sur la liberté de la presse) を要因とする。83 年創刊の『リュテス』誌に始まる 80 年代のデカダン・象徴派系の小雑誌は、群小グループの機関誌的な役割を担った。だがこれらの小雑誌（とくに新聞）は一部を除き、数号のみで廃刊や中断に追い込まれた（第一期小雑誌の終焉）。やがて 1890 年代に、大手プレスを参照・模倣した小雑誌が、装いと名称を新たに始動する（第二期小雑誌の時代）。新しい小雑誌は、分担金制度や株式会社化をつうじて、生産・商業・経済の面で自律性を獲得する。

この小雑誌の黄金期を体現するのが『プリューム 文学・芸術・社会』誌である（1892 年 2 月 1 日号からこの副題に定着した）。『デカダン』誌（1886 年創刊）を前身とする同誌は、1889 年 4 月に創刊された。初代編集長レオン・デシヤンの死後はカルル・ボエスが後を継いだが、かつての勢いは取り戻せなかった（第二期小雑誌の多くが 1905 年までに廃刊した²⁾）。隔週発行の 16 ページ八折版から、31 ページ四折版へと移行し、定期購読のほかに一号 25 サンチームで購入できた。事務所は一度移転して、百人展³⁾で有名になるカルチエ・ラタンのボナパルト通り 31 番地に置かれた。『プリューム』は左岸の小雑誌のなかでもっとも商業的な成功を収めた。初期の編集部は、編集責任者のレオン・デシヤン、編集部秘書のジョルジュ・ボナムール（変名はジュール・クチュラ）、発行責任者のレオン・マイヤール（1863～1915）で構成されたが、編集部秘書は入れ替わりが激しかった。

1890 年代の小雑誌では、『エルミタージュ』のように積極的に新規寄稿者が迎え入れられた。『プリューム』でも定期イベントをつうじて、雑誌・流派・世代の垣根を超えたグループの形成が目指された。そのため従来の象徴主義者、デカ

²⁾ 小雑誌の衰退には複数の要因がある。社会状況や流行の変化のほかに、(1) リーダーの喪失（ヴェルレーヌとマラルメが 1896 年と 98 年に死去）、(2) 編集長の死去や病気、引退による編集方針の大きな変更（『エルミタージュ』からは批評欄がなくなり、隔週誌化以降の『メルキユール』からは前衛色が失われた）、(3) 『白色評論』にとくに見られた財政難や世代交代の失敗などがあげられる。ただし小雑誌の編集方針は『新フランス評論』などの二十世紀の雑誌にそのまま引き継がれている。とりわけ二十世紀に入り、主導的な立場となったジッドやヴァレリーには、自分たちが多分に被った小雑誌からの影響を過小評価しようする傾向が共通して見られる。

³⁾ 百人展 (Salon des Cent) は『プリューム』編集部（とりわけデシヤンとレオン・マイヤール）が主催したメダルや審査員なしのいわゆるアンデパンダン系の展覧会。この名称は出展者の人数にちなみ、事務所に隣接する建物が会場となった。ポスター作品を多く展示し、ミュシャなどの個展が開かれ、カタログやモノグラフィーも刊行された。原則 2 カ月間を会期とし、1893 年末の開幕から 1900 年の閉幕までに、その総開催数は団体展と個展を合わせて 57 回を数えた。左岸には当時独立系のギャラリーが存在しなかったため、百人展は開幕直後から盛況となり、画家や批評家たちの注目を集めた。

ダン、自然主義者といった流派ごとの線引きは好まれなかった。『プリューム』がしばしば「折衷主義」(éclectisme)の雑誌と呼ばれるのはそのためである。アドルフ・レッテが「じっさい『プリューム』とはプディングなのだ⁴」と評したのは有名だが、最初期の1889年から93年(計102号)までに、同誌の寄稿者は総勢712名を数えている⁵。

『プリューム』のもう一つの特徴は特別号の出版にある。デシャン時代の11年間で、同時代の文化現象について計58の特別号が組まれた。文学潮流では、「イデアリスム」(第8号)、「現代主義者たち」(第10号)、「叙情詩人たち」(第14号)、『『ゴロワ』』(第18号)、「デカダンたち」(第34号)、「象徴主義」(第41号)、「社会主義文学」(第49号)、『『若きベルギー』』(第52号)、「プロヴァンス語作家たち」(第53号)、「アナキズム」(第97号)、「ナチュリスム」(第205号)といった特別号がある。デシャンは特集ごとに責任編集者をたて、「社外委託」のかたちで、編集から記事内容にいたるまでを一任していた⁶。

III. 『プリューム』のタベー 若手の発掘と育成

続いて『プリューム』のプログラムを見ていこう。デシャンは雑誌創刊の目的として、若手の発掘と庇護をあげている。「他のすべての雑誌ができなかったこと、やりたがらなかったことを、『プリューム』だけの専売特許とすること。[...]そして「若者たち」が不安がらずに我々のところに来られるようにすること。今後、彼らが解雇通知を恐れる必要がなくなるように⁷。」「新人たちを知ってもらい、諸理論を拡散するための手助けをすること⁸。」だがむろん若ければ良いわけではない。デシャンは才能ある若者を求めた。『『プリューム』の使命は真に才能のある若者たちを支援することだ。」「我々にとって才能こそがもっともすぐれた魔法の言葉だ⁹。』『『プリューム』は若い文学のすべての際立った個性を持つ論文を掲載してきた¹⁰。同誌が目指したのは「エリート」集団の創出であり、デシャンは、才能はあるが機会に恵まれぬ若者たちに、積極的なリクルートを展開した。1892年末の編集後記では、『プリューム』を「闘争のための武器、強い

⁴ Adolphe Retté, *Le Symbolisme : Anecdotes et souvenirs*, Léon Vanier, 1903, p. 166.

⁵ Pierre Lachasse, « Revues littéraires d'avant-garde », in *La Belle Époque des revues 1880-1914*, Éditions de l'Institut Mémoires de l'édition contemporaine, 2002, p. 137.

⁶ Léon Deschamps, « Interview par Georges Brandimbourg », *Le Courrier Français*, 4 septembre 1892, p. 8.

⁷ La Direction, « Notre programme », *La Plume*, n° 1, 1889, p. 7. 亀甲括弧内は引用者による補足を示す(以下の引用でも同様)。

⁸ Léon Deschamps, « Interview par Georges Brandimbourg », *op. cit.*, p. 8.

⁹ Léon Deschamps, « Avis à nos lecteurs », *La Plume*, n° 18, 1^{er} janvier 1890, page de couverture. 傍点は原文におけるイタリック表記を示す(以下の引用でも同様)。

¹⁰ *La Plume*, n° 10, 1^{er} septembre 1889, 2^e couverture.

印象を与えるプロパガンダの道具」と規定したうえで、「新世代の到来」に向けた雑誌の取り組みとして、『プリューム』のタベ」(*La Soirée de La Plume*)と『プリューム』の祝宴」(*Le Banquet de La Plume*)を紹介している。

『プリューム』のタベ」は雑誌の支持者たちの要求により、1889年9月から始まった。その目的は、若手の共同執筆者や定期購読者からなる「闘士たちが、選ばれた聴衆に言葉で訴えかけ、自らの作品を試すことで、自らを鍛えあげる¹¹」ことにあった。1892年1月より、隔週から毎週土曜の頻度となった(夏のバカンス期を除く)。会場もリュクサンブール公園近くのカフェから、事務所に近いカルチエ・ラタンのサン＝ミッシェル広場にあるカフェ・デュ・ソレイユ・ドールの地下に移された。後者のカフェには1870年代後半から80年代前半にかけて、シャ・ノワールの前身となるイドロパットやイルシュットといった前衛グループ¹²が集まっていた。「夜9時に、サン＝ミッシェル広場一番地にあるソレイユ・ドールの店内にあらゆる芸術家が集まり、詩を読み聞きし、音楽を演奏し、芸術について語り合います。[...] 会費の類は求められません。会場は公共の場であって、誰でも紹介なしで来ることができ、一般には同志と、とりわけ主催者のレオン・デシャン氏が、好意的に迎えてくれることをあらかじめ請け合います¹³。」レオン・マイヤールによれば、このタベの狙いは「『プリューム』の書く行為に対して、話し言葉による普及を加えること¹⁴」にあった。つまり『プリューム』では、書かれる(掲載される)テキストの前段階として、テキストを口頭で発表する場が用意されていた。

タベが開始されて以降、若い詩人の卵たちの応募が編集部に殺到していた。1891年の時点で、日に平均して「10編のソネ、3編のオード、2編のバラード、1編のロンデル、数十のスタンス¹⁵」が送られてきていたという。このうち掲載される詩は、1号あたり3編か4編のみであった。クリストフ・シャルルが示した

¹¹ Léon Deschamps, « Postface à l'année 1892 de *La Plume* », *La Plume*, n° 87, 1^{er} décembre 1892, p. 536.

¹² イドロパットの研究は海外では比較的充実しているが、日本語で書かれたものとしては以下のものがある。田中晴子『フュミスム論』, 新書館, 1999年。イドロパットの一部のメンバーがもとなり1881年9月に結成したイルシュット(Hirsutes)も、毎週金曜日にサン＝ミッシェルのカフェ「ラヴニール」に集っていた。デシャンやマイヤールは、自分たちの先駆者としての彼らの活動も意識していた。Léon Maillard, « Un Cénacle littéraire », *La Plume*, n° 3, 15 mai 1889, pp. 23-27.

¹³ Anonyme, « Nos réunions littéraires », *La Plume*, n° 1, 15 avril 1889, 3^e couverture. タベでは当初は一般人の入場も許可されていたが(むしろ飲食代は参加者持ち), 参加者はすぐに『プリューム』の定期購読者(年間購読5フラン, 半年購読3フラン)を中心とする芸術家に限定されることになる。

¹⁴ Léon Maillard, « L'histoire des Samedis de *La Plume* », *La Plume*, n° 76, 15 juin 1892, p. 275.

¹⁵ *La Plume*, n° 64, 15 décembre 1891, page de couverture.

ように、世紀末の25年間で、著作者のカテゴリーのうち、新規参入者の比率が継続してもっとも増えた職業が詩人である。1891年から99年にかけて、詩人全体における新規参入者の割合は実に99.9パーセントを占めた¹⁶。むしろこの現象はマラルメやヴェルレーヌの影響を抜きには語れない。『プリューム』の夕べにはヴェルレーヌが参加したこともあった。このイベントは、こうした詩人を目指す若者に自作を朗読させ、互いに競い合わせることで、若手を育成する場としての機能を担っていた。

ところで『プリューム』以外では、『エルミタージュ』もこうした「夕べ」を定期的で開催していた。「夕べ」を意味する«soirée»という語の使用頻度を調べると（統計の対象は定期刊行物と小冊子）、約5,000回（1870年）、約22,000回（1880年）、約45,000回（1890年）、約48,000回（1900年）、約60,000回（1910年）と右肩上がり推移している（図1）¹⁷。これらのうちすべてがイベントとしての「夕べ」の意味で使用されたわけではないが、ベル・エポック期に夕べという現象が一大ブームになっていたことはたしかである。デシャンが主催した夕べの開催数は実に145回を数えた。だが『プリューム』の夕べが他の数多の夕べと異なるのは回数の多さのみではない。先の引用で見たように、『プリューム』のイベントでは、主催者が会を取り仕切り、リーダー・シップを発揮していた。この定期イベントが特異であるのは、編集部によって管理され、目的化されていた点である。じっさい夕べには、一方では思想的交流や社交の場としての機能があり、他方では参加者によるパフォーマンスを審査し、有望な者には雑誌の門戸を開くという、選抜コンクールの役割が含まれていた。

1892年にデシャンが振り返って語っているように、夕べは聴衆の数が増えすぎたため、「結局、芸術家だけに門戸を開くことになった¹⁸」。毎週土曜にソレイユ・ドールに集う若い前衛芸術家の集団は注目を集め、大手プレスからはしばしば皮肉を込めてレッテル貼りがなされていた。

『プリューム』は、自らがイニシアティヴをとった集会のさらなる成功を前にして、プレスの好意的な記事にあらためて感謝しつつも、そこに集う者たちにつけられたあらゆる称号を完全に拒否することを申し上げておく。我々は「サムディスト」(Samedistes)でも「プリュミスト」(Plumistes)でもない。我々は芸術と文学について語り合うために集まった芸術家であり、今

¹⁶ Christophe Charle, *La Naissance des « intellectuels » 1880-1900*, Les Éditions de Minuit, coll. « Le Sens commun », 1990, p. 241.

¹⁷ 統計にはフランス国立図書館のサイト RetroNews (<https://www.retronews.fr/>) を利用した。

¹⁸ Léon Deschamps, « Interview par Georges Brandimbourg », *op. cit.*, p. 8.

後もそうあり続けるということを主張しておく¹⁹.

『プリューム』が諸派に対して中立的な立場を貫き、党派性を嫌悪していたことはすでに述べた。これは思想の多様性が失われることを危惧したためである。デシャンが定義する雑誌とは、個々人が気兼ねなく意見や主張を述べることのできる場である。「流派への偏りを免れることで、雑誌は各人に思想の全体を表現させやすくする²⁰」。この方針を引き継ぐタベも、特定の思想を偏見の目で見ることが禁じられた、雑誌購読者のアマチュアたちからなる内輪で親密な会であった。そして参加を希望する芸術家の出入りが自由であるという意味で、開かれた会でもあったのである。

IV. 語られた「タベ」― 参加者たちの証言と評価

ここで編集部の言説から離れて、同時代人による証言を見てみよう。そこに共通するのは、このイベントの盛況ぶりと編集長デシャンの存在の大きさである。

『プリューム』のタベでは、シャンソンも歌唱されていた。『エルミタージュ』誌のアンリ・マゼルは、その回想録において、このタベのモデルに言及している。

「彼〔＝デシャン〕は、左岸のロドルフ・サリスになるという個人的な野心以外のものを持っていなかった。それほどまでに、彼はシャ・ノワールの成功に感銘を受けていた。この紳士的なキャバレー経営者〔＝サリス〕は、1889年にデシャンの雑誌で宣言された17名の偉人の一人であった²¹。」マゼルが指摘するように、デシャンのシャ・ノワールへの敬意と愛着は、とりわけ『プリューム』の初期号に顕著である。創刊一年目の1889年6月15日号（第5号）では、早くもシャ・ノワール特集（この号ではシャ・ノワールのアルベール・タンションが編集長、ジョルジュ・オリオールとナルシス・ルボーが編集次長を担当）が組まれている。シャ・ノワールはシャンソニエによる芸術キャバレーとしてだけでなく、新聞を発行していたことでも知られる。そのイラストを豊富に用いたレイアウトや、ポスター芸術への愛着など、『シャ・ノワール』から『プリューム』が引き継いだ遺産は少なくない。ただし『メルキュール』誌のエルネスト・レイノーは、『プリューム』とシャ・ノワールとの相違点を、後者の商業主義に嗅ぎつけている²²。

¹⁹ Anonyme, « Nos soirées littéraires », *La Plume*, n° 22, 15 mai 1890, 2^e couverture.

²⁰ *La Plume*, n° 41, 1^{er} janvier 1891, page de couverture.

²¹ Henri Mazel, *Aux beaux temps du symbolisme*, Mercure de France, 1943, p. 16.

²² とはいえデシャンには優れた経営者としての側面もある。『プリューム』は大衆のニーズに沿った一般向けの読み物として、小雑誌のなかでは群を抜いて商業的な成功をおさめた。その点では『メルキュール』や『白色評論』等と同列で論じることはいかなるのかもしれない。とりわけ (1) イラストや視覚的要素の多い誌面づくりによる発行部数の増加, (2) 単

この『プリューム』の夕べの] 集会がどれだけ気さくで、友好的で、親愛の情からなる善良さに満ちていることか。それがどれだけ、たとえばシャ・ノワールとは異なっていることか。後者では芸術がすぐに物まねやパロディになってしまう！ 人は流行にのって、または動物小屋に行けば珍獣に出会えるかもしれないと期待するように、サリスのところに赴く。この芸術家たちの見世物の裏には、商売や利益といった秘密の目的があるように感じられる²³。

マゼルもこの点ではレイノーに同意している。というのも、マゼルも夕べの文学的な質の高さを認めているからだ。「このような地下の煙の充満した集会は、その気さくな性格はそのままに、朗読者や聞き手の質の高さによって、少しずつすぐれた文学的風情を身につけていった。軽喜劇作家によるカフェ・コンセールのような低俗さにけっして陥ることのない歌やモノローグにくわえて、高貴な詩が作者によって朗読されるのを聞くことができた。」夕べでは若者の自作の詩だけではなく、同時代の著名な詩人たちの作品も朗読されていた。くわえてマゼルは客層の違いにも触れている。「右岸の堅苦しい高名な人物はまったくおらず、左岸の無数の未来の偉人、詩人、学生、画学生、アナーキスト、そしてレオン・デシャンの個性的な友人たちや、やはり個性的な彼らの仲間たちが、濃い煙のなかで陽気に過ごしていた²⁴。」

じっさい世紀末には、流行に敏感な若者以外に、新しい文化を擁護する編集者や批評家たちも左岸に集まっていた。十九世紀後半の前衛は、1870年代後半にイドロパットが集った左岸のカルチエ・ラタンのカフェに始まる。80年代には、前衛は右岸のモンマルトルのキャバレーへと舞台を移した。デシャンによれば、90年代の『プリューム』の夕べは、この右岸の前衛文化を左岸に再移植する試みであった。「かつてのイドロパットはいまや我々のものとなった²⁵。」さらにこの左岸の夕べは、先に述べたように、権限を持つ編集部の管理下で組織的に運営されていた。上記の再移植は計画的なものであったのである。

行本部門での予約販売の導入、(3) 百人展と同時期に開始した安価なポスターの販売、(4) 1892年の株式会社化以降の分担金制度の導入により、経済面での利益と安定を得ることに成功している。

²³ Ernest Raynaud, *La Mêlée symboliste (1870-1910) : Portraits et souvenirs*, rééd. Nizet, 1971, p. 141.

²⁴ Henri Mazel, *op. cit.*, pp. 17-18.

²⁵ Sainte-Claire (pseudonyme de Léon Deschamps), « Nos soirées littéraires », *La Plume*, n° 15, 15 novembre 1889, 2^e couverture. イドロパットやイルシュットとの関係については、「デシャン追悼号」での次の証言も参照のこと。Marcel Baillot, « Poignée de souvenirs », *La Plume*, n° 260, 15 février 1900, pp. 69-72.

アドルフ・レッテによれば、カルチエ・ラタンのカフェ地下は、毎回若者たちで溢れていた。50名ほどの詩人とシャンソニエが競合する会場は、次世代を担う若者たちが作る「小さな文学界」そのものであった。

入場すると、大量のタバコの煙や、けたたましい騒音や、くぐもったピアノの音、鋭い鈴の音や、すさまじい歓声が聞こえる。宮殿？ いやまったく違う。せいぜい100人しか入らないところに、300人いるのだから — あいかわらずあまり快適ではない。愛想がよくて精力的な主催者のデシャン氏がいる。続いて、非常に澁刺として元気な、甘美なるよき少年時代をたたえたおよそ50名ほど〔ママ〕の者たちによって、朗読され、歌唱された詩や歌が、波となり、滝となり、大河となりやってくる²⁶。

オーレリアン・ショールも、タバが若さと笑いに満ちた集まりであったと証言している。参加者は「闘士」(lutteur)と呼ばれるが、各々が友愛の念によって固く結ばれている。タバは、朗読や歌唱といった芸術的行為により若者たちを「融合」させる場であった。

一方が詩を読み、もう一方が歌を唄う。イデアリストや夢想家が、風刺的な歌い手に交替する。感動のあとには笑いがやってくる。

このような友愛に満ちた宴会のなかに、あり余る若さが開花しているのを見なければならない。裏表のないにこやかな顔、率直な握手。ねたみを知らない闘士たちは、各々が相手の成功に拍手を送っている。双方が互いに評価が上昇するのを感じている²⁷。

タバの主催者であるデシャンはほぼ毎週同席していた。イベントの内容は彼自身が報告している。毎回の詳細な記録を雑誌に載せることで、編集部のイニシアティブでタバを管理することに成功したのである。

V. 書かれた「タバ」 — 若手グループの正統性認定について

ではその報告の内容を見てみよう。1889年12月28日の会では、150名の来場があり、会場は満杯となったという。報告では決まって会の参加者と読まれた(歌われた)作品が列举される。参加者については、名前が記されるのはある程度著名な者である。雑誌の編集長や同業の作家たちの名前が記されることが多

²⁶ Adolphe Retté, *op. cit.*, pp. 168-169.

²⁷ Aurélien Scholl, « Préface », dans Léon Maillard, *La Lutte idéale : Les Soirs de La Plume*, Paul Sevin et La Plume, 1892, p. 10.

かった²⁸。小雑誌研究者のヨアン・ヴェリラックは、この名前や作品のリストがある種のグループ表象になっており、その目的がグループの結束の強化と雑誌の権威化にあったと指摘している。「これらの名前のリストは、小雑誌の言説の本質的な機能を暗示的に遂行または再演している。それは若い文学場に現実性あるいは統一性を与えるということだ。また、雑誌のタイトルのみで、人々を集める方法を知っている雑誌に、オーラや権威を与えることを狙っている²⁹。」この解釈は正鵠を射ているように思われる。報告の他にも、この見解を裏づける具体例をあげてみよう。たとえば「『プリューム』の夕べ」の特別号では、夕べに参加した芸術家たちの署名の写しが1ページに大きく掲載されている（図2）。ページを埋めるように隙間なく書き込まれた署名は、夕べのイベントの参加者たちを、グループとして表象したものと捉えることができる。活字で印刷された通常の名前のリストとは異なり、ここでは序列や肩書によるヒエラルキー化も見られない。この共同署名は、現実には夕べが開かれたことの証拠であり、参加者たちの経験の痕跡でもある（手書きで殴り書きされた署名が、いっそうのリアリティを付与している）。

あるいは同特別号に掲載されたテキストを見てみよう。そこでは夕べの歴史が参加者の肖像つきで解説されている。これは1889年から92年までの夕べの参加者たちを、見開きページで、アルファベット順に紹介したものである。肖像にはデッサンによりデフォルメされたものや、横顔などでのポートレートも含まれており、「顔」の紹介にとどまらず、芸術的な意匠を凝らしたものになっている（図3）。じっさいこれらは『プリューム』のお抱え画家による「作品」であり、いわば画家とのコラボレーションでもあるのだ。肖像画の下には、会で朗読・歌唱された作品の詳細なリストが印刷されている。これらの肖像画は、象徴派のアンソロジーとして有名な『仮面の書』全二巻（1896, 1898）で、グールモンが採用したヴァロットンの筆による「仮面」を思わせなくもない。レイアウトに注目すると、グループとしての統一性が感じとれる構図になっていることがよくわかる。こうしたグループ表象では（とりわけメンバーの肖像画では）、現実性を付与する効果とは別に、若手からなるグループの「正統性認定」（consécration）が目論まれているとみて間違いないだろう。

他方で、他の定期イベント（たとえば「祝宴」や「百人展」）と比べると、夕べの扱いは決して良いとはいえない。正統性の認定はむしろ、祝宴をとおしておこなわれる場合が圧倒的に多い。また祝宴や後述する晩餐では、告知、招待状、

²⁸ Anonyme, « Nos réunions littéraires », *La Plume*, n° 18, 1^{er} janvier 1890, page de couverture.

²⁹ Yoan Vèrilhac, « Les soirées de *La Plume* », in *Presse, chanson et culture orale au XIX^e siècle : La parole vive au défi de l'ère médiatique*, Nouveau monde Éditions, 2012, p. 173.

献立表等の機能を備えた芸術的なポスターが、雑誌に縁の深い画家たちに毎回発注され、制作される（図 4）。先行研究で指摘されているように³⁰、夕べの報告は多くの場合、表紙裏に印刷されるのに対し、「祝宴」の報告は雑誌の内部に印刷された。この違いが大きいのは、この時代の雑誌の表紙は、年ごとに製本されるさいに、廃棄されるものだったからである。各小雑誌のリプリント版でも、表紙一式が復元されることはない。つまり祝宴に比べて、夕べの記録は少なくとも対外的には重視されていなかった。このように編集部は、夕べを若者が中心の内輪の会、祝宴を大作家が中心の公式の会というかたちで区別していた。じっさい、祝宴にはジャーナリストや著名な作家が名を連ね、無名作家や女性作家が呼ばれることはなかった。

VI. 雑誌から単行本へ —『プリューム』の出版システム

編集部が二つの定期イベントを区別した理由は二つある。第一に祝宴において巨匠たちを自分たちのグループに招き入れることで、雑誌を権威づけるためである。第二に最終的には若手を支援する意義を言論界や出版界に広く認知させるためである。そして表向きには「祝宴」の目的は新旧世代間の交流と親睦に置かれていた。「文学や芸術の論争からとげとげしさや侮辱的な暴力を取り除くこと。巨匠と新参者の関係を全面的に変化させること。年長者たちに対するからかいを愛情ある敬意に置き換え、年長者たちをより広く知らしめること。最後に、年長者たちと若者たちの一種の融合を生じさせることで、編集室や出版社に若者たちがアクセスできるようにすること³¹。」すでに示唆したように、1880年代の小雑誌の多くは、デカダンや象徴派のグループ内の主導権や正統性をめぐる不毛な「論争」（罵詈雑言を含む）に明け暮れた。また年長者に対する「からかい」については、パルナスに対する象徴派の若手の嘲笑が想起できる。90年代に入ると、ジュール・ユレの『文学の進化についてのアンケート』（1891）に代表されるように、新旧世代の統合がジャーナリズムの言説によって後押しされた。上のデシャンの提言もその流れに沿うものである。世代の枠を超えた連帯について、新参者が大作家の知名度を利用するケースは、すでに80年代の小雑誌にも見られた。多くの場合、若手が作った雑誌には、権威づけや売り上げの促進のために、しばしば特別寄稿者として大作家が招かれた。

『プリューム』の祝宴では、ゾラ、コペ、ルコント・ド・リール、マラルメ、

³⁰ Philipp Leu, « “La diffusion par le verbe”. La forme revuiste comme matrice du réseau de sociabilités de *La Plume* », *Vie de bohème et petite presse du XIX^e siècle. Sociabilité littéraire ou solidarité journalistique ?*, Presses universitaires de Paris Nanterre, 2018, pp. 296-297.

³¹ Léon Deschamps, « Postface à l'année 1892 de *La Plume* », *op. cit.*, p. 536.

ヴェルレーヌ、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ、ロダンなど、文学と美術の諸流派の巨匠が会長を務めた。開催前の告知にくわえ、開催後には雑誌に詳細な報告文が載り、会長の挨拶や祝杯の詩、会長へのオマージュが各号の中枢に掲載された。『プリューム』の祝宴が他の雑誌の祝宴に比べて特殊だったのは、1892年から「『プリューム』の晩餐」(Le Dîner de *La Plume*)へと置き換わった点である。祝宴で提供される料理が不評であったため、メニューの改善が図られたのである。「我々の何名かのうちですでに存在する友好的な関係を緊密なものとする目的で、『プリューム』の晩餐」と題する月例の晩餐会を創設することを決定した³²。会場は1892年11月からは、サン＝ミッシェル広場5番地のレストラン・デュ・パレに定着した。晩餐にはドレスコードはなかったが、夕べとは異なり、参加者は正装で参加した³³。

1892年3月に組織されたこの晩餐会は、デシャンによる事業拡大の一環である。同年1月4日にプリュームは株式会社化されている。「株式会社プリュームは、雑誌に必要なあらゆる拡張を付与すること、雑誌の存続を保証すること、一連の美術書を出版すること、展覧会を開催することを目的とする³⁴。」この「展覧会」とは1894年2月に開幕される百人展を指している。そしてこの「拡張」には「一連の美術書」を含む「芸術文学叢書」の規模拡大が含まれている。「ロップス、ルドン、リュス、デブータンなど、まだ世に知られていない選りすぐりの芸術家による挿絵を施した、新人作家だけの貴重な作品のアンソロジーを作りあげること(芸術文学叢書)。この試みの成功をとおして、出版社に対して、彼らの不安定な会社が、我らの若い同志を迎え入れることで救われるということを実証すること³⁵。」

「芸術文学叢書」とは1890年に始まった『プリューム』の単行本部門で、『エルミタージュ』、『メルキュール』、『芸術と批評』の3誌との協賛で著作が出版されていた(のちに『プリューム』叢書も立ち上げられた)。『プリューム』は粗悪な紙を雑誌に用いていたが、この挿絵入りの叢書には特別紙を用い、限定版扱いにして発行部数が抑えられていた。そのため当時からコレクターの蒐集の対象となった。予約販売や単行本の売り上げによって、雑誌の収入源の安定を図ろうとしたわけである。ここにはデシャンの商業主義が色濃く見られるが、利益

³² *La Plume*, n° 69, 1^{er} mars 1892, p. 128. 晩餐や百人展では参加費や会費が徴収されており、第一回の晩餐の参加費は5フラン、百人展の年会費は次の研究によれば年間38フラン(1902年)であった。Philipp Leu, *op. cit.*, p. 302.

³³ 晩餐と祝宴の機能については次の研究を参照のこと。Julien Schuh, « Les dîners de la *Plume* », *Romantisme : la revue du dix-neuvième siècle*, Armand Colin, 2007, pp. 79-101.

³⁴ *La Plume*, n° 112, 15 décembre 1893, p. 57. 資本金は四万フランで、一株100フランの400株に分割された。

³⁵ Léon Deschamps, « Postface à l'année 1892 de *La Plume* », *op. cit.*, p. 536.

の大半は、この叢書から単行本を出版する若手作家たちの資金的援助にあてられていた。「この叢書の基本方針は、受け取った予約購読料の全額を用いて、芸術的にも物質的にも作家たちを支援すること³⁶」にあった。デシャン自身は次のように記している。「雑誌を作る前は完全に無名だった共同執筆者のうちの何名かが、我々のもとで成功したのち、パリの大手プレスにくわわった。また別の者たちも、有力な出版社と優位な契約を交した³⁷。」じっさいタベの参加者リストを見ると、有力紙の少なからぬ編集長がこのイベントを訪れていたことがわかっている。このイベントへの参加と『プリューム』への寄稿をつうじて人脈を築き、大手プレスに寄稿する機会を得た若者が、早い時期から一定数いたのだろう。上の発言は『プリューム』の影響力の大きさを誇示するものだが、デシャンの評価がしばしば二極化するのには、彼のうちに優秀な編集者とした俗物的な出世主義が同居しているためだといえる。だがやがてデシャンは、ポスター芸術の領域において、大手プレスにはない『プリューム』の独自路線を強く打ちだすことになるだろう。

VII. おわりに

1890年代は、すでに見たように前衛詩人を志す新人が増え続けた時代である。彼らに発表の場と出版の機会を与えることが、文学場の発展にとって急務となっていた。小雑誌『プリューム』の編集長レオン・デシャンは、この若手を支援する手段として、80年代に流行した文学キャバレーをモデルとする「タベ」を組織した。新たな才能の発掘と育成が、この催しの目的となっていた。タベをはじめとする『プリューム』の定期イベントは、新旧世代からなる象徴派グループの特権的な「社交」(sociabilité)の場となった。だが真に注目すべきは、デシャンが若手のキャリアステップに必要な制度を、雑誌を軸として物質面で整備したことである。すなわち、(1)雑誌が主催する「タベ」への参加を呼びかけ、(2)他の若手と競合して研鑽を積ませ、(3)雑誌に作品を寄稿させたのち、(4)「祝宴」での巨匠たちとの同席を促し、(5)雑誌の単行本部門から著作を出版させる。じっさいデシャン自身が示唆しているように、タベのイベントと『プリューム』の「芸術文学叢書」の結びつきは、かなり強かったようである³⁸。とは

³⁶ Grégoire Tonnet, *La Plume 1889-1899. Une revue « pour l'art »*, Jean-Michel Nectoux (dir.), Catalogue d'exposition, INHA 2007, p. 14. とはいえむろん本の印刷費は著者自身が負担した。さらに「芸術文学叢書」の出版点数は途中まで年に4冊のみと定められていた。« Echos d'art & de littérature », *La Plume*, n° 28, 15 juin 1890, page de couverture.

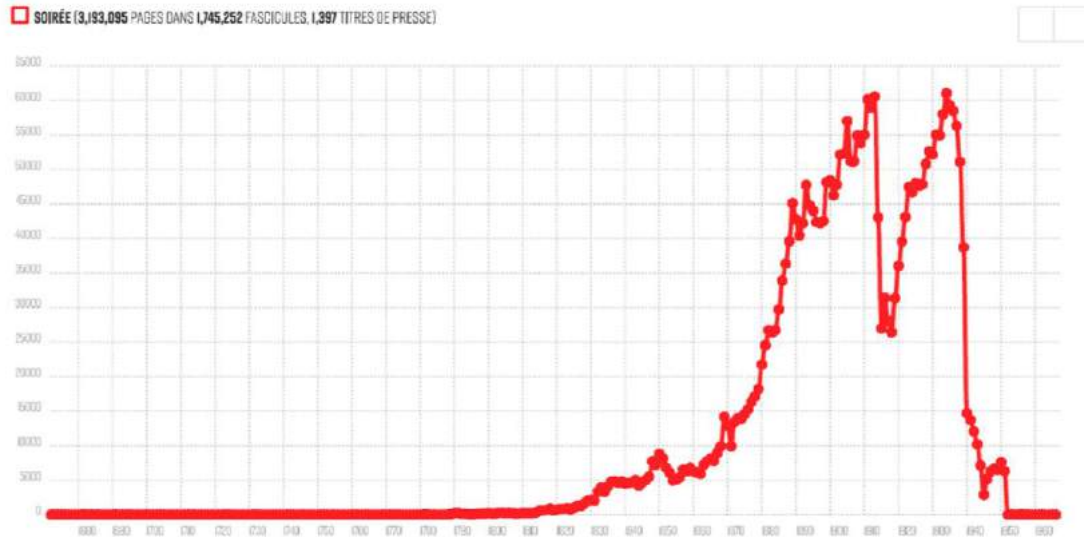
³⁷ Léon Deschamps, « Avis à nos lecteurs », *op. cit.*, page de couverture.

³⁸ 今後フランスにおいて、「芸術文学叢書」の網羅的なカタログと、編集部が交わした手紙を精査し、この叢書から単行本を刊行するまでに至った新人の一覧表を作成する予定である。

いえこうした出世主義の思想には、世紀末の価値観が色濃く反映されており、当時から批判にもさらされていた。だが少なくともデシャンが、夕べの主催をとおして出版人との出会いの機会を提供し、新人に小雑誌への門戸を開いたのは事実である。このように才能ある若手詩人を支援するために、イベントへの参加から単行本出版にいたる作家養成のシステムを独自に構築したことこそ、現代からみた『プリューム』の評価すべき点があり、デシャンの卓越した手腕が発揮された部分があるといえるのではないか。

(山形大学)

【図版】



Graphique généré le 22 novembre 2021 parmi 1,934 titres de presse, 2,682,030 fascicules, 16,445,033 pages

図1 単語「soirée」の使用頻度の推移



図2 「タベ」の参加者の共同署名



図3 「タベ」の参加者のポートレート

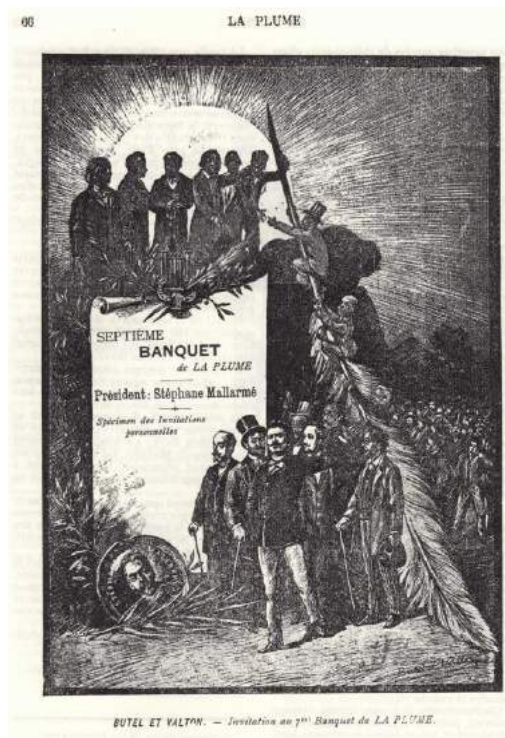


図4 「祝宴」と「晩餐」の招待状

【résumé】

Institutionnaliser l'avant-garde en littérature fin-de-siècle
***La Plume* et la naissance d'un jeune groupe de poètes et de revuistes**

La littérature fin-de-siècle assiste à la naissance d'une nouvelle forme de collectivité. Les « Soirées de *La Plume* », organisées par Léon Deschamps, ont pour rôle de former autour de la revue qu'il dirige un groupe de jeunes poètes et chansonniers du Quartier Latin. La singularité de ce groupe littéraire peut se traduire, d'un côté, par l'acceptation de l'éclectisme et le refus du dogmatisme, et de l'autre côté, par la présence régulière du président de la revue qui gouverne les jeunes artistes à la réunion. Devant un public nombreux, chaque participant est invité à « dire » son texte écrit avant de le publier dans le périodique. Certes, ces soirées sont une occasion de rencontres d'amis et de rivaux pour les jeunes, mais elles fonctionnent également comme un concours de sélection qui consiste à évaluer les performances de chacun afin de dénicher les meilleurs talents encore inconnus et de les développer. C'est sous les auspices de Deschamps que certaines jeunes élites seront permises de publier dans sa revue une série de textes dits lors de la soirée. À partir de l'année 1890, la revue lance sa maison d'édition, dont le but est encore d'aider les jeunes créateurs en éditant leurs ouvrages. *La Plume* devient ainsi l'institution presque unique à l'époque qui autorise les jeunes artistes d'avant-garde à développer leurs activités autonomes.

Yosuké GODA
Université de Yamagata

＊）本稿は「JSPS 科研費：課題番号 19K00491」の助成を受けた研究の一部である。

編集後記

日本フランス語フランス文学会東北支部会誌第15号をお届け致します。今号の内容は、2021年11月27日に弘前大学の主催によってオンライン開催された東北支部大会にもとづいております。

2020年の春に始まったコロナ禍は衰えることなく続いており、3年目に突入してしまいました。そのような中で学会活動を継続して行くというのは難しいものがありますが、今回も多く皆さん（とりわけ、他地域、他学会の研究者の皆さん）のご協力を得て支部会は開催され、それをもとにした学会誌も無事に刊行に漕ぎつけることが出来ました。ここに改めてお礼を申し上げます。

東北支部と北海道支部の合併という事情から、東北支部としての学会誌の刊行はこれで終わり、次号から形態が少し変わることになります。引き続きご支援、ご協力を賜われますよう、心よりお願い申し上げます。（K.S.）

投稿規定

1. 日本フランス語フランス文学会東北支部会員は、この雑誌に投稿することができる。他に、編集委員会が認めた場合は会員以外からの投稿も受理する場合がある。
2. 投稿希望者は、原則として東北支部大会で口頭発表の後、これをもとにした原稿を投稿するものとする。ただし、編集委員会が認めた場合は研究発表を経ない原稿の投稿も受理する場合がある。
3. 投稿希望者は、事前に支部事務局に連絡し、執筆要項を受領し、それに沿って原稿を作成する。
4. 講演原稿、シンポジウム報告、書評など、論文以外の投稿も受け付ける。
5. 使用言語は、日本語もしくはフランス語とする。
6. 論文の分量は、本文、注を含めて日本語の場合は 16,000 字以内、フランス語の場合は、A4 版 15 枚（4,800 語）以内を原則とする。他のジャンルの分量については、編集委員会に事前に問い合わせられたい。
7. 投稿原稿は、Microsoft Word 形式の添付ファイルで支部事務局に送る。締め切りは、支部大会の翌年の 1 月末とする。
8. 原稿の採否、掲載時期は、査読を経て編集委員会が決定する。
9. 雑誌は、日本フランス語フランス文学会東北支部会ホームページ上での刊行を原則とするが、適宜冊子体での刊行も行う。
10. 冊子体での刊行においては、原稿執筆者に本体 10 部、また抜き刷り 30 部を贈呈する。

(2010 年 11 月 13 日開催の支部総会にて一部改訂)

Nord-Est

Bulletin de la Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises du Tohoku, n° 15

日本フランス語フランス文学会東北支部会報 第15号

編集責任者／坂巻康司

編集委員／今井勉，寺本成彦，今田陽祐，深井陽介

2022年4月30日発行

発行者／日本フランス語フランス文学会東北支部

<http://genesis.hss.iwate-u.ac.jp/sjllf-tohoku/>

支部事務局への問い合わせ等は，上記ホームページの「ご意見&ご要望」ページをご利用ください。



フランス政府公認フランス文化・語学教育機関

Alliance Française



Association franco-japonaise



Liberté • Égalité • Fraternité
RÉPUBLIQUE FRANÇAISE

仙台日仏協会・ アリアンス・フランセーズ

Centre officiel de langue et de culture française
Association franco-japonaise - Alliance française de Sendai

フランス文化

Événements culturels

Médiathèque

フランス語

Cours de français

法定翻訳・通訳

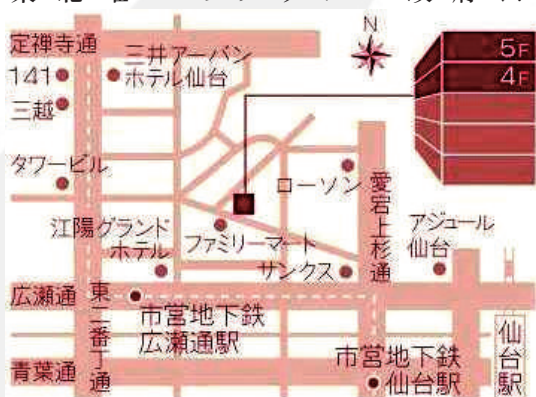
Traductions certifiées
Interprétariat

フランス語試験

DEL F/DAL F/TCF

SENDAI

様々なレベルに対応した安心・丁寧なフランス語講座、フランスを楽しむ文化イベント、各種翻訳・通訳やフランス語試験を《東北のフランス》として展開しています。各教育機関・団体等への講師派遣も承っております。東北唯一のフランス政府公認機関アリアンス・フランセーズへおまかせください！



Venez découvrir la culture et la langue française dans la bonne humeur, quelque soit votre niveau !

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町二丁目8-10-4F・5F

TEL: 022-225-1475 FAX: 022-225-1407

Mél: contact@alliancefrancaise-sendai.org

HP: <https://afsendai.wordpress.com>

